
とある未完の大気支配(エアルール)

目だま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある未完の^{エアルール}大気支配

【Nコード】

N35190

【作者名】

目だま

【あらすじ】

ある雪の降る冬の日、一人の能力者が生まれた。

彼が不幸な少年と関わった時、物語は始まる……………

オリ主介入チート物の二次創作です。そう言った物が苦手な方は戻るを押してください。原作沿いに進めていきますが、かなり変わるところがあると思います。

不定期更新です。頑張りますが遅くなる恐れがあります。

プロローグ 一人の始まり（前書き）

始めましての方やお久しぶりの方もいると思います、目だまです。

注意

- ・これは作者の思い付きから始まった自己満足小説です。駄文でも気にしないで下さい。
- ・ハーレムが入るかもしれませんが。このキャラはあの人じゃないと駄目だ！！と言う方は面白くなかったら戻ってください（え
- ・基本、主人公チートです。
- ・他にも幾つか連載しているので遅れるかもしれません。

プロローグ 一人の始まり

この物語はある雪の降る冬の日、一つの研究施設から始まる。

学園都市。東京西部に位置し、総面積は東京都の約三分の一に相当、総人口は230万人をほこり、その約八割が学生である学術都市であり、都市の内外ではその技術に数十年の差があるとまで言われている。

この学園都市は脳に開発をする事で科学的に超能力者を作り出すことに成功している。そしてその目的は『SYSTEM』と呼ばれており、研究者はこれを目指し日夜研究に励んでいる。

しかしながら、その研究方法は全てがまともな物ばかりではない。

中には非人道、非法な研究をしている施設も少なくない。この施設もそう言った物の一つだった。

研究の内容は『能力昇華計画』^{スキルアップ}。

これは能力のレベルを上げるのではなく、能力そのものを強化することによりある能力を生み出し『SYSTEM』に至るための計画だった。そして実験の方法は、まず通常の開発を施し能力を発現させ、その後脳に特殊な開発を施すと言う物で、実験の対象には『置き去り』^{チャイルドエラー}が選ばれた。

『置き去り』とは、親が学園都市に子供を預け初期の学費のみを払い、失踪してしまった、平たく言えば捨てられた子供達の事であり、どんな風に扱っても文句を言うものではなく、実に都合のいいものだと言えるだろう。

実際に二回目の開発後、多くの者が植物状態に陥るかそのまま脳が耐えられずに死んだ。

この物語の主人公も『置き去り』チャイルドエラーとしてここに連れてこられた者の一人だった。ただし、少しばかり特殊だったが……………。

「くそっ、また失敗だ!!」

男達の声が響く。さつき連れて行かれたのは僕と仲の良かった子だったが、どうやら死んでしまったらしい。

「どうするんだよ!? クライアントは今いる奴らで成果を出せなきゃ援助は打ち切るって言ってるんだぞ!!」

「理論は問題ないはずなんだ。やるしかないだろ……………」

「ちっ、次で最後じゃないか」

男が僕の方へ歩いてくる。どうやら次の実験は僕のような。いや、そもそももう僕しかないか……………。

男が僕の手を引っ張る。その所為で最近切っていない自分の黒い髪が目にかかる。本当に鬱陶しい。

僕は、いや、ここにいた子供は皆『置き去り』チャイルドエラーだった。捨てられた理由はさまざまだが自分が捨てられた理由はよく分かっている。

親が僕を捨てた理由は簡単。気味が悪かったから。どう言う訳か僕には前世の知識がある。記憶ではなく知識。前世で知ったことをそのまま僕も引き継いでいる。

最初は教えられてもない言葉や文字を読み書きした事で親も天才だとか言って喜んでいたがしばらくすると逆に気味悪がり出し、僕は学園都市に捨てられた。

知識から察するに前世の僕はどうかやら一般的な人物だったようだ。しかし主にサブカルチャーと呼ばれる物や電子機器に関する知識が異様に多かった。そしてその中の知識の一つに『とある魔術の禁書目録』に関するものを見つけた。どうにもこの世界は僕の前世では物語だったらしい。これは所謂転生物だろうか、と考えもしたが、後で考えても意味が無い事に気付いた。

「準備完了」

考え事をしている間に準備が整ったらしい。体にさまざまなコードを取り付けられ、椅子に座らせられる。

「実験開始」

「—————っ!」

全身に激痛が走り、声にならない叫びが漏れる。

ここで僕の世界は反転した。死にたくない。それが最後に思った事だった。

その日、一つの研究所が学園都市から消えた。

数年後のある日。

この日、一人の灰色の目と髪を持つ異様に目立つ少年がお金を下ろすために郵便局に来ていた。

他に用など無く、お金を下ろしたらすぐに帰るつもりだったのだが一人のニット帽をかぶった男が拳銃を取り出した事によって事態は一変した。

「（面倒な・・・・・・・・・・）」

だが、少年が抱いた思いはこれだけ。そもそも拳銃だけではこの少年の脅威にはなりえない。

「（今日は早く帰って愛穂さんとどこかに食いに行くつもりだったんだが）」

居候させてもらっている料理を炊飯器でする変な人を思い出す。
・・・・・・・・・・どうしようか？

「のはっ！ー！」

あ、ツインテールにした子供が強盗を思いっ切りのした。

あの子、『ジャッジメント風紀委員』か？

動きは良いが複数犯の可能性も・・・・・・・・・・

「きゃあー!？」

ほら・・・・・・・・・・。

しかもこいつさっきの奴と違って落ち着いてるな。
能力に自信があるのか？

「（ガキを人質につて・・・・・・・・。。そりゃ、やつちゃ駄目だろ）」

既に俺も臨戦態勢に入る。まずは空中に浮いてる『アンダーライン滞空回線』を郵便局の外に出す。

「（結構多いな。しばらくかかるか・・・・・・・・。）」

撤去してしまえば異常に気付くだろうが誰が行ったかまでは分からないはずだ。

俺の能力はまだばれる訳にはいかない。

そうなれば愛穂さんを一番に巻き込む。あの人には数年間面倒を見てもらった恩がある。

ジリジリジリジリ！！！！

「（警報？チツ、面倒になってきたな）」

警報に合わせて警備用のロボが出てくる。

男はそれを見て舌打ちをして距離をとり、右手をポケットに入れて何かを取り出す。

それを確認せずに警備ロボが出ると同時に突撃を仕掛けるツインテール。

「（鉄球？やっぱり能力か・・・・・・・・！！）」

男は取り出した鉄球をロボに向って投げつける。

当たって跳ね返るはずのそれはそのまま直進しロボの構想を食い破る。

「（まずいつ！！）」

そのままロボットは大破。破片が飛んでツインテールのほうへ向うがそれをメガネを掛けた少女がかばう。

このままであれば少女は背中に大怪我を負ってしまうだろう。

「（させるかよっ）」

少女の周りに不可視の盾をはる。

もつとも破片は防げたが、衝撃までは手が回らず気を失ってしまったが。

「（『アンダーライン滞空回線』撤去完了。監視カメラ破壊！！）」

周囲に気付かせないように監視カメラの内部を弄くって使用不可能にする。

「さて、始めようか」

「（私の所為です。私の所為で固法先輩には怪我をさせ、初春は人質にされてしまいましたの。」

なんてザマ……。これでは半人前以下ではありませんか……

・！！！）」

「（せめて初春だけでも……）」

「さて、始めようか」

「へ？」

声が響くと強盗の男がいきなり弾き飛ばされる。

「こ、これは一体……？」

「大丈夫か？」

そして突如、灰色の髪をした少年が何も無かったはずのところに現れて声を掛ける。

「あ、あなたは……」

「まあ、唯の通りすがりだよ。それとこっちの子も無事みたいだぞ」

「はっ、初春!!」

「し、白井さん」

「よかった。無事でしたのね……。ですがこの方は？」

「ま、ちょっとそっちに避けといてくれるか？大分あいつにはイライラしてるんだ」

そう言うと強盗のほうへ歩き出す。

「迷彩系の能力か。なめんなよ!!」

起き上がった男はポケットから複数の鉄球を投げつける。

「なめてんのはてめーだよ」

「なっ!?!」

しかし鉄球の全てが少年に届く前に溶けて消えてしまう。

「どう言う事だ!?! 迷彩系の能力じゃなかったのかよ!!」

「誰もそんなこと言っていないだろ? なあ、あんた知ってるか? 空気中の酸素の割合が増えたらどうなるか……」

「何言って…….. な、何だよ、これ!!!!?」

いきなり男の目から血が出始めて倒れる。

「答えは、目からの出血、さらには手足の痺れだ。大人しくしてな」

「じゃ、後は任せたよ。二人とも」

少年は少女達に声をかけそのまま文字通り姿を消した。

「ちょ、まだ事情聴取が!!」

「じゃーねー」

最後に聞こえたのはそんな気軽そうな少年の声だった。

これは物語が始まる前のプロローグ。

一人の少年の生い立ちと二人の少女との邂逅。

少年は二人の少女に信念と憧れを与えた。

そして彼の物語はこれから数ヵ月後に始まる……。

こんなのが常盤台か。世も末だな……。 (前書き)

長くなったので二つに分けました。

こんなのが常盤台か。世も末だな…………。

夜、二人の少年が学園都市を走っていた。

片方は黒髪のツンツン頭、もう片方は髪と目の色が灰色をしていて適当に伸ばしており、二人とも高校生として平均的な体つきをしている。

そんな少年達が夜の街を全力で走っていた。

「ちくしょー！！こうなつたのは全部当麻の所為だからな！！」

「はぁ！？お前だって反対しなかったじゃねーか！！」

「んだと！？元はと言えばためーが「バチバチバチッ！！」っアップね！！」

灰色の髪をした少年のすぐ横を雷が走る。

「喋りながら逃げるとは随分と余裕じゃない。この私から逃げてるのに」

その声を聞き、二人は恐る恐る振り返る。

そこにいたのは茶色い髪を短く切ったお嬢様学校と名高い『常盤台中学校』の制服を着た少女がいた。

もともと、その顔には好戦的な笑みを浮かべ、前髪から電気による火花を散らしているためとてもお嬢様には見えないが……………。

ことの発端は遡ること数十分前、俺、星見夜風ほしみ よかぜが高校入学後寮の部屋が隣と言うこともありすぐに仲良くなった友人、上条当麻かみじょうとうまと街を歩いていたときに数人の男に囲まれている少女を見かけた事による。お人好しの我が友人はすぐにその中に突っ込んでいった。

その少女が先程から俺達を追ってきているのだが、どうも当麻は男達に説教を行ったのだがその中に少女が不愉快に思う単語が多々あったらしい。

具体的に言えばガキだとかロリコンだとか……。しかも運の悪いことにその少女、かなりの高レベル保持者。さらに好戦的、悪く言えば子供っぽい。

その場で電流を放って、ナンパをしていた男達を昏倒させた。しかし当麻は右手に宿る『幻想殺しイマジンプレイカー』で電流を打ち消してしまい、その所為で喧嘩を売られ追い掛け回されている。

あれ？何で俺追い掛け回されてるんだ？

「なあ当麻」

「何だ！？」

「回想した結果、俺はまったくの無関係だと思うので戦線を離脱したいと思う」

「お願いします、見捨てないで下さい！！」

「自分のフラグは自分で回収しろ。それが例え死亡だったとしても・

「……………」

「頼む！！今度なんか奢るから！！」

そのまま立ち去ろうとすると、右手で俺の肩を掴んで止める。
ちっ、掴まれていたら姿を消しても意味が無いな……………」

「放せ！！金じゃ命とつりあわねーんだよ！！」

「そんな事言わずに！！」

「……………いい度胸じゃない」

「へ？」

「この私を前にして無視するなんて……………」

あ、これやばい。

まさかの俺にも死亡フラグ？

「当麻、十数本の雷全部消せる？」

「いやー、さすがの上条さんでもそんな人間離れした真似は出来ませんよ？」

だよねー。

はあ、仕方ないか……………」

「当麻、動くなよ」

「消えた!？」

「？」

驚いた顔の電撃中学生。

それとは対照的に何が起きているか分かっていない顔をしている当麻。

「あ、もう良いぞ」

「あ、そう？で、何したんだよ」

「俺達の周りに大気を圧縮した膜を作ったんだよ。その膜が光の屈折させて俺達の姿を隠してくれてるんだよ」

「へー、便利だな……。ん？でもそれなら声は向こうに届くんじゃないか？」

「お、当麻にしては珍しう的を射た発言だな。実はその膜の上にさらに真空の膜を作って中の音を遮断してるんだよ」

それだけなら向こうの声も聞こえないんだけど、膜に当たる波と同じ物を中に作っているから、向こうの声は聞こえる様にしている。

「お前の能力ってホントに便利だな……………」

呆れ顔で言ってくる当麻。

まあ、便利といえは便利だな。

俺一人のために何人も犠牲になったが。

その後少女は俺達を見つけることが出来ず、憂さ晴らしにそこら辺に電流撒き散らせて帰っていった。

まあ、その電流がこちらに飛んで来て肝を冷やしたが……………。

「やつと行つたな。まったく、今度ちゃんと飯奢ってもらつかな」

「分かつてるよ。ほら、戻って来ないうちに帰ろつぜ」

そう言つて二人は寮の方へと歩いて行く。

「絶対に目付けられたな……………」

「だよな……………」

その背中はどこか煤けていた。

常盤台の電撃少女との遭遇の次の日。俺は特にすることも無く街をぶらぶらしていた。

今日は能力測定があつたため学校は午前中で御終い。
システムスキャン

能力を隠している俺は能力測定の日はずり。

普段つるんでいる奴らも昼からは暇なはずなのだが、それとは別に純粋な学業の成績不振のため残らされたらしい。

途中で飯を食っていなかった事に気付き、適当なファミレスに入っただが……………

「何で居るんだよ……………」

「何よ、居ちや悪いって言うの」

悪いというなら俺の運だろう。

当麻の不幸がうつったか？

その入ったファミレスに昨日の電撃少女が後輩らしき少女として、入った瞬間に発見、そのまま捕まり席まで連行。

当麻、お前の口癖借りるぜ。

「不幸だ……………」

「すみませんがお尋ねしたいことがありますの」

後輩らしき少女が口を開く。

この少女、俺を見てから、ずっと首を傾げていた。

「何だ？」

「以前、どこかでお会いしませんでしたか？」

「ん？……………いや、覚えてないな」

茶髪のツインテール、何となく頭に引つかかる事があったのだが具体的に思い出せない。

何だったかな？まあ、そのうち思い出すだろ。そう考えて取り敢えず店員にコーヒーを頼む。

「そうですか。まあ、これは私も何となくの質問だったので構いませんわ。では次に……お嬢様との関係は？」

急に少女の雰囲気が剣呑なものに変わる。
どうもこっちの質問が本命だったらしい。

「お姉さま？」

「ええ。御坂美琴お姉さまですわ」

「え………」

驚いて電撃娘、御坂のほうを見る。

「こいつが『超電磁砲』か………」

「あら？ご存知在りませんでしたの？」

「ああ、今知った。俺とこいつの関係は………被害者と加害者だな」

この表現がぴったりだな。しかしこいつがレベル5か………世も末だな。

「何かすつごくムカついたんだけど。あと原因はそっちにもあるでしょ」

「それは俺じゃなくて連れた。しかし、レベルは高いと思っていたがまさか『超電磁砲』とは」

つくづくついてないな。

これ当麻もぜんぶあいつのせいだ・・・・・・・・！！

「一体何をしましたの、お姉さま？」

呆れ顔で言うツインテール。

どうもこう言う事は前科があるらしい。

・・・・・・俺の中の常盤台のイメージがどんどん崩れていく。
取り敢えず色々と省きながら昨日の事を説明する。

「それは・・・・またご迷惑をお掛けしましたわね」

「いや、悪いのは俺の連れと御坂だけで、えっと・・・・・・・・」

「ああ、申し遅れましたわ。私、白井黒子しづくと申しますの。以後お見
知りおきを」

「ああ、どうも。白井が悪いわけじゃないからな」

そう言って頼んだコーヒーを飲む。

どうも二人とも長居するつもりは無いらしく何も頼んでない。

「ねえ、いい加減アンタも名乗りなさいよ」

「えー、あんまり御坂に情報を与えたくないんだけど・・・・・・・・」

「どっいつ意味かしら・・・・・・・・」

「そのままの意味だよ」

だって危ないし。

それと頼むから店の中で電気を出さないでくれ。
周りの迷惑だ。

「はあ、高校一年、星見夜風だ。よろしく」

「星見さんですわね。分かりましたわ」

「で、二人はこれからどっか行くのか？」

「ええ、知り合いを待っていますの」

話によると白井は『風紀委員』ジャッジメントに所属していて、そこで仲の良い少女に御坂を紹介して欲しいと頼まれ、ここで待ち合わせをしていたとの事。
別のところにして欲しかったと思った俺は悪くないはずだ……

「よろしければ、一緒に如何ですか？」

「は？」

え？

会ったばかりの男をそのまま遊びに誘うのはどうだろうか……

「昨夜はお姉さまがご迷惑を掛けたようですし、その償い……
と言つのは建前で、本音を言つとどうもスッキリしないので、その
うち思い出すのではないかと……」

無理にとは申しませんけどね、と付け足す。

確かに暇を持て余していたからちようどいいが……。

「そっちの連れは良いのか？待ち合わせしてるんだろ？」

「問題ありませんわ。お姉さまも構いませんわね？」

「私は構わないわよ。聞きたいこともあつたし」

その聞きたい事つてのは絶対に能力についてだろ。

「じゃ、そうさせてもらうよ」

そして俺の同伴が決定した後に白井がこれからの予定をまとめた手帳を開き、その中を御坂が見て読み上げたのだが……。白井の本性を見たというか、まともな対応に上がっていた好感度が一気に下がったと言うか。

しかも途中でその友人、初春ついはると言つらしい、を駆除しようとまでしていたのは、正直引いた。

まあ、人の趣味嗜好にまで口を出す気はないけど。

で、今俺の前で、白井の頼みなら仕方がないと言つ御坂に感激して抱きついている白井の姿がある。
ちなみに

「お客様。周りのお客様のご迷惑になりますので……………」

と言われるまで白井の変態的行動は続いた。

「取り敢えず、ご紹介いたしますわ」

店を出た後、拳骨を貰った白井の友人と合流し、紹介してもらっている。

話では一人のはずだったのだが、一人増えたらしい。

黒髪を長く伸ばした少女と黒髪を短くして頭に花の飾りを大量に乗つけた少女なのだが、花の髪飾りの少女のほうがずっと俺を見ているのだ。

………何かしたっけ？

「こちら、柵川中学一年、初春飾利かどりさんですの」

「は、初めまして。初春飾利……です」

「それから………」

「ど〜も〜。初春のクラスメイトの佐天涙子で〜す。何だか知らないけど着いて来ちゃいました〜。ちなみに能力値はレベルゼロです」

わざわざ能力値まで言う必要性は感じないんだが………。御坂を意識してんのか？

「初春さんに佐天さん………。私は御坂美琴、よろしく」

どうも、二人ともレベル5に対して先入観があったのか、少し驚いた顔をしている。

ま、そこら辺は人によりけりだと思うけどな。

「で、こちらは……」

「あ、俺も言うのか。えゝ、高校一年、星見夜風だ。さっきのファミレスで御坂に拉致られて参加することになった。あんま年上だとか気にしないでくれるとありがたい」

御坂が拉致って何よー！！とか騒いでるが、あれは完全に拉致だった。

間違いない。

「えっと、一つお聞きしてもいいですか？」

初春が話しかけてくる。

さっきからずっと見ていたが何だ？

「どうぞ？」

「去年の秋頃に郵便局で強盗に会いませんでしたか？」

えゝと、去年の秋、去年の秋……まだ愛穂さんにお世話になった頃の話だな。

……あ！！

「もしかして人質の子？」

「そうです！！やっぱりあの時の人だったんですね！！」

どうやら当たりらしい。

と言うことは、白井があの中の『ジャッジメント風紀委員』の子か……。

ぜんぜん覚えてなかったな。

「ほら、白井さん覚えてませんか？あの時助けた貰った……」

「ああ、そんな事もあったような……。って、あなた、あの時監視カメラ全部壊しましたわね！！あの後大変だったんですわよ！！調書書こうにも記録に残ってませんし！！」

そう言えばそうだったな。

「うん。まあ、壊したのは悪かったけど、それが『ジャッジメント風紀委員』の仕事だしね」

「むっ！！」

「まあまあ、白井さん。落ち着いてください。星見さんのおかげで怪我人も無かったんですから」

「それは、そうですね……」

「ねえ、何の話？」

佐天が話しに入ってくる。

まあ、二人は置いてきぼりの会話だよな。

「去年の秋頃、郵便局に入った強盗に初春が人質にとられたのをちよつと助けただけだ」

メチャクチャ簡潔にまとめたが間違っではないだろう。

白井の恥もわざわざ語る必要も無いしな。

「凄かったんですよ？鉄の玉溶かしたり、触ってもいないのに相手倒したり」

「そうよ、あんた、昨日何したのよ？いきなりあいつごと消えたけど」

「そう言えばあの時も姿を消していましたわね……………」

……………これ、誤魔化せるかな？

今のところ、俺の能力を知っているのは当麻と学校にいる二人、それに愛穂さんだけなんだけど…………。

「ま、取り敢えず動こうぜ。ずっと立ちっぱなしだし」

俺がそう言つと待つてましたとばかりに例の手帳を出す白井。

あ、また殴られた。

んで、その後、御坂発案でゲーセンに行くことに。

常盤台がそんな所に行くとは思ってなかったのか二人はキョトンとしていたが。

俺？もうお嬢様に対する憧れは捨てました……………。

こんなのが常盤台か。世も末だな……。 (後書き)

女の子のキャラでは初春が好きです。後、姫神も好きです。

男では土御門とセロリさんが好きです。

と言う事でこのメンバーとは絶対に関わりを持たせるつもりです。

暗部編は原作持っていないからかって読み直さなきゃ…………。

「俺は『大気支配へエアルール』って呼んでる」(前書き)

サブタイトルは中に出てくる台詞に決定しました〜！

「俺は『大気支配へエアルール』って呼んでる」

数分後。

御坂がカエルのストラップに釣られて公園でクレープを食べる事に予想以上に人が多かったため初春と白井は場所取りへ、俺たちは佐天、御坂、俺の順番で並んでいる。

ストラップの数に制限があるらしく、さっきから御坂は目に見えてイライラしてる。

「ガキかよ……………」

「ん？何か言った？」

「いや、何も」

思わず口に出たのだが、都合よく御坂は聞いていなかったらしいが、佐天には聞こえていたらしく苦笑いしている。

さっきも佐天が話しかけようとしていたが、御坂の様子を見て断念と言っより話しかけても絶対にまともな反応が返ってこないだろうし。

そんな事を考えているといつの間にか佐天の順番が回ってきた。

「お待たせしました。どうぞ、最後の一個ですよ」

「どうも……………って最後！？」

「うわぁ……………」

御坂はのお目当てのストラップは佐天まででなくなってしまったそう
だ。

その一言を聞いて御坂は見事にOTZ状態に・・・・・・・・・・
・そんなに欲しかったのか。

「あの、これ、いります?」

まあ、そう聞かざる得ないよな、これは・・・・・・・・・・。

「いいの!? ホントに!?!」

あ、復活した。

その後、上機嫌になった御坂は正直可愛かったと言っておこづ。
これで中身がまともならな・・・・・・・・・・。

「何か突然イラッってしたんだけど・・・・・・・・・・」

「気のせいじゃないか?」

なんて勘の鋭さだ。まさに野生動物並み。

「で、あんたの能力ってなんなのよ」

ベンチに座って、初春の頭の花を千切ろうとしていた白井とも合流
して、クレープを食っていると御坂が切り出してきた。

「言わなきゃ駄目?」

「当たり前でしょ」

「私も気になります。色んな事してましたからね」

さも当然、と言った風にうなづく御坂に初春が同意する。

「この期に及んで隠そうとしない方が良いですわよ？いざとなれば、
バンク
書庫で見ること出来ますし」

「あ、それ意味無いぞ？俺、システムスキャン能力検査受けてないから」

「え！？そんな事出来るんですか！？」

「いや、サボってるだけ」

「なんだ・・・・・・・・・・」

落胆を隠そうともしない佐天。何を期待しててたんだ？

「でも、どうして受けないんですか？星見さんなら最低でもレベル
3はいくと思うんですけど」

「一応、理由はあるんだけどね。あんまり話せる理由じゃないんだ
よ」

下手するとこいつらまで巻き込む事になるからな。
常盤台二人はともかく、佐天と初春はきついと思うし・・・・・・・・・・
。

「で、能力の名前ぐらいは教えていただけますよね？」

仕方ないか………。

風を操り、アンダーライン滞空回線を撤去する。

俺に残ってる原作知識からそろそろばれても問題ないんだけど、一応の用心って奴だ。

「俺は『エアール大気支配』って呼んでる」

「『エアール大気支配』………聞かない能力名ですわね」

そりゃそうだ。俺みたいな未完成品がホイホイいてたまるか。

「それってどんな事が出来るんですか？」

「簡単に言えば能力名通り、大気を自由に弄くれる」

「それって『エアロシユーター風力使い』とどう違うの？」

矢継ぎ早に質問してくる。正直、勘弁して欲しい。

「『エアロシユーター風力使い』は風の流れを操るだろ？俺の能力は風だけじゃなく、大気に含まれる物体や大気そのものを操る事が出来る」

「大気に含まれる物体？」

これは佐天の質問。

最初のどんな事が……ってやつが初春、その次が御坂だ。

「窒素や酸素、二酸化炭素にその他の微量な気体だな。俺はそれら

の濃度や流れを操る。他には気流はもちろん気温、湿度、気圧、密度なんかもいけるな。化学薬品やその他の物質なんかも気化させれば同じように出来るんじゃないか？」

「何か、とんでもない能力ですね……………」

「ま、その分の代償はあったけどね」

「代償？」

「この能力は御坂みたいに努力して手に入れた訳じゃないからな。それなりに代償はあるさ」

「具体的にはどのような物なんですか？」

「幾つか有るけど、分かりやすいところを言えば髪と目の色。昔はどっちも黒かったんだけどね」

そう言うと全員が驚いた顔をした。
いや、そこまで驚かんでも……………。

「……地毛だったの（んですか／んですの）！？」「」

「そっちかよ！！」

「いや、そうなりますよ。そんなに特徴的な色してれば」

「うつ……………」

まあ、灰色だしなあ。

染めてるって思われても仕方ないよね……。
この色の所為で教師やガラの悪い奴らに目を付けられてたからなあ。
……あれ、何だか泣けてきたな。

「グスツ、あとは……左目はともかく右目は殆ど見えてないな。他にも細々《こまごま》とした幾つかの身体障害。簡単に言えば運動の出来る虚弱体質ってところか」

「……」

ありや、黙り込んでしまった。

やっぱり話すべきじゃなかったなか？

元から話すつもりは無いが、実験の内容は絶対に話さない様にして
おこつ。

あれはある意味地獄だからな。

「ん？なあ、今日平日だよな？何であの銀行閉まってるんだ？」

少しばかり空気が重くなってしまったため、気まずさから辺りを見
渡していると銀行のシャッターが閉まっている事に気付き、聞いて
みる。

「え？」

ドガアッ！！！

するとその銀行のシャッターが歪んで爆発。
さらに、そこから三人の男が出てきた。

「……いやあ、お前らとこつ言つ場面に合つのは二回

目だな」

「悠長なこと言ってる場合ではありませんの!!」

持っていたクレープを一気に口の中に詰め込み、初春へ『アンチスキル警備員』への連絡、怪我人の有無の確認を任せ銀行のほうへ駆け出そうとするがそれを御坂が呼び止める。

「黒子!!」

「いけませんわ、お姉さま。今度こそお行儀良くして貰いますわよ」

白井に呼びかける御坂に対して余裕の笑みを浮かべ言う。

「さてさて、あの時からどれぐらい成長したんだろうなあ」

「あなた、結構性格悪いですね……」

「ありがとよ、褒め言葉だ」

そう言い返すと白井は俺を思いつきり睨んで、男達の前に立ちはだかり、投降する様に警告。

しかし相手は白井の事をなめているらしく爆笑。

一人大柄な男が白井に殴りかかるが、白井は服の袖をつかみ、足払いをかけ一回転させ地面に叩きつける。

「スゴイ……」

「さっすが黒子」

「何だ三下かよ……………」

相手を見た目だけで判断するのは拙いだろ。特にこの学園都市では、他の男が能力を使い炎を生み出すが、

「相手に手の内明かしてどうするんだよ……………」

結局、その後、白井が能力を使い男は小さな鉄矢で地面に縫い付けられた。

白井って『空間移動能力者』^{テレポーター}だったのか、なんてことを考えながら最後の一人を監視しておく。

御坂たちの方は男の子が一人いなくなったので探しているらしい。強盗は既に逃げ始めており、車の傍にいる男の子に気付き、人質として連れて行くつもりとしている。

当然、気付いていた俺は広場から出て急ぐが、このままじゃ間に合わないか……………？

「畜生放せよ!!」

「ダメッ!!」

しかし、俺よりも早く佐天がいた。

強盗は子供を連れていこうとするが、佐天が必死に抵抗し子供を放さない。

埒が明かないと、強盗の男は足を上げ、佐天の顔目掛けて蹴りを放とうとする。

「ここまでカスだとは思わなかったな」

が、その蹴りが佐天に届く前に横からそいつの足首を掴み、地面に着いているもう片方の足に足払いをかけて転ばせる。

その隙に、佐天と子供は公園の広場まで避難。

残された強盗は、傍にある車に乗り込もうとしているが、『超電磁砲^{ガン}』に『空間移動能力者^{テレポーター}』までいるんだ。逃がす事は無いだろう。

「怪我、無いか？」

「あ、はい、大丈夫です」

「そっか。良かったよ」

まあ、蹴られる前に助けたから怪我はしてないと思ってたけどな。うん、間に合って良かった。

「あの……ありがとうございます」

「気にしないでいいよ、けど……」

「……どうしたんですか？」

「お前は強いのか弱いのか、はつきりしないなあ」

何か出来る事を、と思って子供捜すのに協力したり、危険なの分かって強盗から子供を守ったかと思えば、今度は役に立てなかったとも思っているのか暗い顔をしている。

「……弱いに、決まってるじゃないですか。レベル0ですよ、私」

「そんなもんが重要なのはこの街の中ぐらいだ。俺が言ってるのは別の強さだよ」

「別の、強さ？」

「そつ。俺の基準で言えば、御坂、白井、初春は強い。お前は分かるん」

まあ、知り合ったばかりだから何とも言えないけどな、と付け足す。佐天は少し驚いた顔で聞いてくる。

「初春も、ですか？」

「そつだよ。俺の周りなんて強い奴ばかりだぜ？弱い側の人間としちゃ、気が滅入るよ」

やっぱり筆頭は当麻だな。『幻想殺し』持つてるから人を助けるんじゃないくて、人を助けてるあいつに『幻想殺し』があるだけ、だからなあ。

まったく、力がないと何にも出来ない俺とは大違いだ。

「星見さんが弱い？」

「ああ。俺には能力がある。だから、さっきみたいに普通に強盗の前に出て行けた。能力に自信があるからな。でも、それだけだ。もし、能力が無きゃ、お前みたいに子供を捜しに行く事さえ出来ないだろうしな」

「.....」

佐天は何も言わず、黙って話を聞いてくれている。

「まあ、俺の言う強さってのは精神的なものだよ。さっきのお前は強かった。誇れよ。お前は子供を危険から守ったんだから」

自分を褒めてやれ、と付け足しながら目線を佐天から御坂達に戻す。そこには手からビーム（多分レールガン）を出して車をぶっ飛ばす御坂がいた。

「……まあ、なんだ、いくら能力が高くても碌でもない奴はいるし、能力なんかよりも大切なものがあると思うわけだよ、俺は」

「はぁ……」

「お前はせつかくそれを持ってるんだから、もうちょっと胸張ってる」

「そう、ですね……」

「そうそう。せつかく可愛いんだから暗い顔してるより笑ってるほうが得だぞ？」

「か、可愛いつて／＼／＼」

俺の言葉を聞き、佐天が顔を赤くする。

少しくらい表情が和らぐ。さっきまでの暗い顔よりもこっちのほうがずっといいだろう。

「安心しろ。客観的な意見で他意はない」

まあ、当麻辺りなら気にせずフラグでも立てるんだろうけど、俺はそこまで鈍くない。

「最後に、お前は自分に出来る事をやって行けばいいんだよ。さっきみたいにな」

「でも、結局は星見さんに助けられて……」

「さっきも言っただろ？あの子が助かったのはお前のお蔭だよ。俺じゃ間に合わなかった」

「でも……」

「でも、じゃ無い！子供を守ろうとしたお前は能力なんて無くても十分格好良かった！だからもう自分は役立たずだなんて思うな！！分かったなっ！！」

「は、はいっ！」

まだ何か言いたそうな佐天を遮り、おれは自分の言いたい事を言う。
俺なんかよりも強いのに何時までも悩んでんじゃねえよ、まったく……。

「いやあ、いつの間にか夜風も言うようになったじゃん」

後ろから聞こえた聞きなれた声に脳が停止する。

ギギギと油の切れたロボットの様にゆっくりと後ろを向く。

「よっ、久しぶりじゃん」

そこには緑のジャージを着た女の人が立っていた。長い黒髪を後ろで一つに纏めている、美人の範囲に入るであろう人が（尤も、いつもジャージを着ている所為でそう言う評価を貰う事はなかなか無いが）。

「……………お久しぶりです、愛穂さん」

「えっと、星見さんの知り合いですか？」

「この人は黄泉川愛穂さんと言って、うちの学校の教師、兼『アンチス警備員^{キル}』で……………」

「こいつの保護者じゃん」

「……………保護者あ！！？」

おう！？御坂達はいつの間にこっちに來たんだ！？

しかもきっちり話し聞いてたっぽいし。

全員が若っ、とか似てない、とか言ってるが当たり前だろう。

「あれ？でも苗字が……………」

「だから、保護者だ。母親じゃなく」

「こいつ、『チャイルドエラ置き去り』で、たまたま引き取ったじゃん」

初春の疑問に俺が答え、愛穂さんが補足する。
が、それを聞いて四人が固まる。

「『置き去り』……?」
チャイルドエラー

「そうじゃん。昔はこいつ、殆ど表情無くって感情読み取るのに苦労したんだよ」

「いや、昔の話は勘弁してください、まじで!」

あの頃は何か、色々どうでもよくって、ずっと無表情だったのを覚えてる。

正直、今思い出すとかなり恥ずかしい。

「それが今じゃ、女の子四人も侍らせて……」

「侍らせてねえよ!!」

「私の心はお姉さまだけのものですわ!!」

「そんなもんいらんわ!!」

愛穂さんの言葉に反応して突っ込む俺、反論する白井にさらにそれ
に突っ込みを入れる御坂、苦笑いしながら見てる佐天、顔を赤くし
て何か考えてる初春……って、ちよっと待て!初春の様子が
変!普段なら佐天と一緒に苦笑いしてるんじゃないのか!?いや、
今日会ったばかりだから何とも言えないけど、そんなイメージだっ
たぞ!?

「ね、ねえ、黒子、初春さんって……」

「あ、そう言えば、去年書庫^{バンク}のデータで星見さん探し回ってました
わね……。レベル3までの生徒は全て探したのに、と」

「あー、だから最初、すぐに気付いたんですかね」

おい、聞こえてるぞお前ら!!

頼むからそう言う核心に触れるような話は絶対に聞こえない場所で話してくれよ!!

正直どう接していいのか分からなくなるだろ!?

「へー、あの夜風がねえ……」

愛穂さん、ニヤニヤしてないで助けてくださいよ! アンタが原因でしょう!?

なんだ、さっきまでの、俺と佐天が話してた時のシリアス? な空気は何処に行ったんだ!?

あ、そう言えば愛穂さん『シリアスをコミカルに処理する』なんて言われてたなあ……。

やっぱり、この人の所為だな。うん、そうに違いない。

「えへへへ」

お願いだから、取り敢えず現実へ帰ってきて初春!!

この空気は『^{エアリアル}大気支配』でもどうにも出来ないぞ!?

ああ、当麻が不幸な目に合った時に右手を恨めしそーに見てる理由が分かった気がする。

その後、初春を白井と佐天が正気に戻し、俺と御坂は事情聴取でも、その間中愛穂さんニヤニヤしてるし最後のほうは何処であっ

たんだ、とかどう思ってる、とか事件に関係ない事聞いてきやがった。

もう疲れた、早く帰りたい。

のだけれど、帰り道にもう一個、厄介事が落ちているのを俺はまだ知らなかった。

・・・このフラグは放置じゃ駄目ですか？あ、はい、駄目ですか、そうですか・・・。

「俺は『大気支配へエアルール』って呼んでる」(後書き)

感想とか意見とか・・・もらえると嬉しいです。

書いてる小説に感想が少ないのはやっぱり技量不足だろうか・・・
・。

「爆ぜろ」

広場で御坂達と別れた後、コンビニで晩飯の買い物を適当に済ませ、帰宅する途中に何をとち狂ったのか俺は近道でもするか、と最近取り壊しが決定した広めの部屋が連なった四階建てほどの廃墟の中を通る事にした。

中に入ると、まるでフラグを回収する様に、そこには四人の女の子が立っている。

最近、ちよつと当麻と一緒に居過ぎたかもしれない。普段の俺ならこんな所を通る事も、ましてや通って中で女の子と会うことも無かっただろう。

だから、これはきつと当麻のフラグ建築（出会いのみ）と不幸スキルが俺に移った所為だろう。

正直、女の子が居る分には別に構わない。俺も男だ。出会い位は欲しいからな。だが、彼女達の周りに明らかに息をしない男達が倒れているのは勘弁して欲しい。

まったく、出会いなら佐天とか初春とか人畜無害な奴に限定して欲しいもんだ。当然、御坂や白井は除外。ビリビリや百合は遠慮したい。

「結局、死体を見てもまったく物怖じしてない貴方は何なの？」

金髪？ブロンド？まあ、どっちでも良いけど、の長髪に絵描きが被ってそうな帽子をした小柄な女の子が話しかけてくる。

「何、か。誰、ならまだ答え様も有るけど……強いて言うなら一般人A？」

「ふざけてる？」

「まさか。別に弄り甲斐がありそうだな〜とか思ってる訳じゃないよ」

ほんの冗談で言っただけなんだけど、俺の返答が気に入らなかったのか手に持っていたぬいぐるみを投げ付けてくる。

「？」

飛んで来るそれを避けるでも無く、何となく見ていたのだが、俺の近くに来るとそのぬいぐるみが爆発した。

「マジでっ!？」

ドンッ!!

決してビルとしては広いとは言えない室内に煙が充満する。

廃墟とは言え劣化が激しい訳ではなく、古いだけの建物には窓などの換気できる部位が少ない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「フレンダ、何か合図してくれなきゃ超迷惑です。私や麦野はともかく滝壺の事も考えてください」

「私は大丈夫」

「これで結局、ギアラ入ったりは・・・・・・・・」

「ある訳無いでしょ」

「だよね……」

ゴウッ!!

「……!?」「」

四人が好き勝手言っている時に風が吹いた。

まさしく突風と言って良いほどの風が室内の煙を強制的に外に出していく。

「おうおう、嬢ちゃん好き勝手言ってくれるじゃねーの」

いきなりぬいぐるみが爆発するという事態に普段のキャラを忘れてどこぞのチンピラの様にな言葉遣いになっているが、気にしないでおう。

いや、驚いた所為で対応が遅れ制服の端がこげている。

「何で生きているのかは超不明ですが、大人しく殺されてください」

短髪の見様によつては小学生ほどの子が接近してくるが、

「随分と珍しい能力だな」

「『オフENS・アーマー室素装甲』が!？」

途中で急停止し、そのままバックステップで元の場所まで戻る。

「何をしたんですか？」

「手品の種を教える手品師はいないぞ？」

まあ、単純に能力で常に少女の周りの窒素を霧散させているだけだけど、とこれは声に出さないでおこう。

爆弾少女に珍しい窒素使い、こりや残りの二人も難敵か？なんて事を考えていると、さっきの二人よりも発育の良い、しかし雰囲気的に受け付けない少女？が一步前に出る。

「絹旗、能力使えないなら下がって。滝壺、使ったときなさい」

そう言つて滝壺と呼ばれた少女に白い粉の入ったシャーペンのケースの様な物を投げる。

うわ、あれ使うのか……。

その中身を推測し、かなり嫌な気分になるし、何か厄介そうなので滝壺と呼ばれた少女が受け取る前に気温を上げて無理やり燃やす。

「危ないもの使ってるなあ。副作用知ってるか？」

先程の中身は体晶と呼ばれる薬品だろう。

それは能力を意図的に暴走させ、さらに副作用付きと言うデメリットしかない物なのだが……。恐らく彼女が使えばメリットがあるんだろう、と適当に憶測し、目の前の相手に集中する。

多分、この中で一番ヤバイ。能力的にも雰囲気的にも。

「……まあ、良いわ。ここで殺してあげる」

睨むように言う女。それが出来る自信があるのだろう。未知の能力相手にもまったく動じない。

「見逃す……って言う選択肢は？」

「ここまでしておいてあるわけ無いでしょ」

「そっちの被害体晶だけじゃん……」

体晶と俺の命……うわ、割に合わない！

仕方が無い、こっちも死ぬ訳にはいかないし、少しばかりシリアスに決めようか。

はー、と細く息を吐き、目を閉じ、スイッチを切り替える。

次に目を開けたとき、その目には何の感情も映らない。表情も冷たく、無機質なものに変わっているだろう。

相手はその変化に警戒を顕わにしているが、ここはもう俺の空間だ。

「爆ぜろ」

その一言を合図に、幾つもの衝撃が空間を走る。

種はいたって簡単。圧縮した空気を一気に開放するだけ。それだけで十分な破壊力を生み出してくれる。でも、

「やっぱり……」

気絶ぐらいしてくれるかと思ったんだけど、そうはいかないみたいだ。

衝撃で中に溜まっていた埃や崩れた土埃なんかで視界が悪い中をレーザーのような光の筋が俺の方に突き進んできた。

大気の動きで軌道を読み、一歩横にずれる事で避ける。

「……あ」

今思っただけ、最初の爆発に紛れて逃げれば良かったんじゃ・・・。

い、いや、過ぎた事を言うのは止めよう。だが、そのアイデアは応用する。

先程の大気を圧縮し球体に形作った爆弾をさらに倍作り上げ、開放する。

視界を悪くしてそのうちに逃げる作戦だ。

殺す？そんな面倒な事するか！

だが、やり過ぎた様で、余りの衝撃に建物自身が耐えられなかったらしい。

まあ、簡単に言うと、

「おい、ここ、数分で崩れるから早く逃げな」

本当なら今すぐにでも皆でペチャンコなんだけど、さっきの子の能力を真似て天井を窒素で支えている。

・・・結構便利いな、これ。

取り敢えず、死なれると面倒なので見え無い向こう側に声を掛けておいて、とつとと退散する。

まあ、目的が達成できたからよしとしよう。

・・・これ、明日問題になるよな・・・。

あれ？シリアスに決める予定だったのに・・・。

さっきのビルから逃げ出し、寮に帰る道の途中。

先程と同じ轍を踏まないように人通りの多いところを選んでいるのだが、問題が一つあった。

「何でお前はこっちに居んだよ・・・。」

「・・・・・・・・超間違えました」

そう。さっきの少女達のメンバーの一人である室素少女が俺の隣を歩いているのだ。

さっきの建物には俺が入った入り口ともう一つ、少女達の奥に入り口があり、彼女の仲間は奥のほうへ走った様だが、こいつは俺が出た方へ走って来てしまったのだ。
何故間違える・・・・・・・・。

「仕方ないじゃないですか！一回転んじやった所為で向き超分かんなくなっただですよ！！」

「そんな切れんなよ・・・・・・・・」

室素少女を適当に宥め、道を歩く。

「で、何で付いて来る？」

「いえ、このまま帰ったら麦野が超怖いんで」

「・・・・・・・・見逃せよ？」

「それ以前にあなたを捕らえる手段が超ありません。携帯は落しちまいましたし・・・・・・・・」

「お前、運無いな」

まるで当麻を見ている気分だ。あいつはいつもの事だけど。

「超ほつといて下さい!!」

「落ち着けよ、室素少女」

「室素少女!? そんな呼ばれ方したの超初めてですよ!」

え、結構良い渾名だと思ったんだけどな……。

「気に入らないか?」

「超気に入りません!」

「じゃ、少女N」

「そのNは絶対に室素のNですよね!? 普通に絹旗でいいですよ!」

「へー、絹旗って言うのか」

「あつ……」

明らかにしまった、と言う表情をする室素少女N改め絹旗。

そう言えばさつきも呼ばれてたな。じゃ、あの金髪がフレンダでジャージが滝壺、怖いのが麦野か。

「で、お前ら何者? 暗部?」

「……何で知ってるんですか」

「いやあ、一人友達に居るんだよ」

妹ラブの変態だけだな。

そう言えばあいつの時も任務の途中で鉢合わせになったっけ？
俺って思ってるより運悪いのかな…………。

「本当に何者ですか、あなたは…………。」

「だから、一般人Aだって。」

「暗部に友達が居るような人を一般人Aとは言いません。」

まあ、普通居ないよな。

でも他に所属があるわけでも肩書きがある訳でもないからなあ…………。
…………どうしたものか。

「取り敢えず、俺の名前は星見だ。これで情報は五分五分だろ？」

「それ、超あなたが損しますよ？ 私達、バンク書庫にアクセスできますから。」

「じゃあもつと情報よこせ。」

「渡すわけ無いでしょう。」

だよね…………。

さっきから一つ気になってるんだけど…………。

「どこまで付いて来るんだ？」

「……………………。」

「家があるなら早く帰れ。名前だけでも十分な情報だろうが」

書庫バンクにアクセス出来るなら履歴書に載ってる程度の情報は引き出せるだろうし、暗部は上から必要な情報は渡されるって言うてたしな。もしかすると実験の内容まで判明するかもしれない。

「もしかして、帰れない、とか……?」

いくつか思いついたここにいる理由の内の一つを適当に言ったのだが、それを聞いた絹旗はビクッ!と分かり易過ぎる反応を返してきた。

「…………マジで？」

「し、仕方無いじゃないですか!今日はこの後にも仕事入っっていて現地に向かう車の中で内容聞く予定だったんですよ!?麦野の性格じゃ探したり待ったりはして無いだろうし、財布とか隠れ家の鍵とかは全部その車の中ですし…………」

そこまで言い切って絹旗は深い溜息を一つ。

「…………本当に当麻の不幸が俺から移ったか?と本気で考えてしまう程気の毒に思える。」

と言う事で、絹旗と俺の現状を打破するために行動を起こす。

「じゃ、金やるからそこら辺の公衆電話でリーダー…………麦野だっけ?に電話しろ」

ズボンのポケットから財布を出し、中の百円を一枚手に持ち絹旗の方へ向ける。

「あ……ありがとうございます」

それを見た絹旗はお礼を言いながら百円に手を伸ばすが、ここで待ったを掛ける。

「……………何ですか」

絹旗は俺に、それこそ人が殺せそうな視線で睨むが、今後の俺の命の為にその視線に耐える。

「条件が一つ」

「……………聞きましょう」

絹旗は少し悩み、背に腹は代えられないと思ったのか、俺に続きを促す。

「お前が麦野に電話を掛けた後、俺に変わって欲しい」

「……………それ位なら構いませんが、番号は見ないでくださいよ?」

よし！交渉成立！

「分かってるよ」

電話番号を暗記される事を危惧したんだろうけど、十一桁の番号をたった一回見ただけで完全に暗記できる程俺の記憶力は良くない。いや、やろうと思えば出来るけど、そんな面倒な真似して敵を増やしたく無い。

取り敢えず、絹旗に百円を渡し公衆電話を探す。俺の携帯でも良いのだが番号が残る可能性がある物は使いたがら無いだろうと思って提案しなかった。そこら辺は絹旗も分かっている様で何も言っていない。

数分後、無事公衆電話を発見し、絹旗が受話器を手に取り番号を押し始める。俺はその間、言われた通りに公衆電話に背を向け周りを眺めていた。

少ししてブルルルルと言うコール音が聞こえ始めた。

「あ、もしもし？麦野ですか？」

無事、繋がったらしい。正直に言っこのまま繋がらずに途方に暮れると言うパターンも考えていたのだが、杞憂だった様だ。

絹旗は今までの経緯を説明していたが、相手も怒っているらしく、何度も謝っていた。

さて、この後の俺と麦野の会話がどうなるかと絹旗^{コイツ}はここでお別れ

「それで次の場所は？・・・遠いですね・・・。え？もう来なくて良いって？！」

――雲行きが怪しくなってきた。

「で、でも・・・い、いえ、確かにその内容なら問題ないでしょうけど・・・。私の荷物は？明日いつものファミレスで渡す？じゃあ今夜どうするんですか！？」

まさか間接的な接触でここまで人を不幸に出来るなんて・・・。
当麻、恐ろしい子！（上条当麻は関係ありません）

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・はい・・・・・・・・分かりました・・・・・・・・」

どうやら押し切られたらしい。

コイツ、今夜本当にどうするつもりなんだろうか？

「そうです、さっきの・・・・・・・・じゃ、変わります」

その後、二言三言ぐらい言葉を交わし、ものすごく暗い表情をした絹旗が俺に受話器を渡してきた。

「何と言つか、まあ、ご愁傷様・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うつ」

俺がそう言つと絹旗は公衆電話の根元に蹲ってしまった。
・・・・・・・・さて、今度は俺の番だな。

「はい、お電話変わりました、一般人Aです」

『・・・・・・・・まあ、良いわ。それで、用件って何？』

何か気になる間があったのだが今回は結構マジなのでスルー。命と引き換えにギャグを取るほどお笑いに命掛けてません。

「ぶっちゃつけ、俺を狙わないで欲しい」

今回は交渉でも何でもなく、単なるお願いなので単刀直入に言う。

「お前らと会う前から暗部の存在は知っていたし、それを誰かに言うつもりも無い」

『それを信用しろ、と?』

「ああ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

暫くの無言。おそらく何か考えているんだろう。何を考えているかまでは分からないが。

『一つ、条件があるわ』

まあ、条件無しで信用しろって言うのは無理だよな。

と言う事で、内容を聞く事にする。暗部に入れ、とかじゃない限りやるつもりだ。

「内容は?」

『今晚、絹旗の面倒見てあげてくれないかしら?』

「・・・・・・・・・・は?」

その言葉を聞いて、俺はフリーズした。

『絹旗から聞いた話で、あんたは言わ無いだろうと思うし、ちょうど良いから利用させてもらうわ』

「・・・・・・・・・・ええ・・・・・・・・」

マジでずるいよ、コイツ。で、あれだろ?それで断ったら言わ無い

って分かってても命狙ってくるんだろ？
選択し無いじゃん！！

「・・・・・・・・分かったよ」

と言う事で、今夜一晩小学生のお守りだそうです。
はぁ、どうしよう・・・・・・・・。。

「当麻も共犯か!？」（前書き）

今度から出来上がった物を上げていくやり方に変更！
さらに不定期になる予感!？

「当麻も共犯か!？」

「駄目だ……もう死ぬ。いや、いつそのこと殺す……」

「何朝つばらから物騒な事呟いてんだよ」

「つたく、と久々に登場した（昨日が余りにも長く感じたためそんな気がする）当麻が呟きながら寝不足で死にそうな俺の隣を歩く。」

「なあ、ホシちゃん、昨日は朝帰りだったみたいだけど何してたんだにゃー？」

さらにその横を歩くのは薄い青のグラサンを掛けた妙に手の長い少年、我が悪友の一人、土御門元春^{つちみかど もとはる}である。

高い背丈に、短い金髪をツンツンに尖らせている、見た感じ不良っぽい奴なのだが、実際はただ悪そうな奴はモテると言う間違えた感性を持った義妹ラブの変態だ。

「何か物凄く聞き捨てなら無い事を思わなかったかにゃ？」

「気のせいだろ」

勘の鋭い元春の追求を同様も迷い無く切り捨てる。

「まあ、そんな事はどうでも良いんだぜい。実際、どうだったんだ？あれか？とうとう大人の階段上っちゃったのかにゃあ？」

まあ、本人も何となく思ったただけの様で、それっきりで別の話題に

切り替わった。

だがニヤニヤ笑いながら長い手を肩に掛けてくるコイツはウザイ。

「アホか。昨日は一晩中子守だ」

「子守い？何だそりゃ？」

「そのまんまの意味だ。ガキの世話」

うぜえと肩に掛けられた手を払いのける。

子守の言い方はあんまりだと、本人が聞けば激怒するだろうが、実際こちらからすれば子守以外の何物でもない。

昨日、麦野と話した後、絹旗に事情を話し、近くのアミレスで夕食を取り、絹旗の提案で映画を見に行った。

ここまで聞けばデートの様にも聞こえるが、見た映画は超B級。何と言うか、普通だった。面白くもなく、詰まらない訳でもない。すごく普通。

詰まらないのなら色々と言句の言い様もあるし、絹旗を責める事も出来たのだが、余りにも普通であるそれに文句を言う訳にもいかない。

それに、見たいと言っていた絹旗は満足していたし、まあ、良いか、と時間と資金の浪費については諦めた。

尤も、その映画について絹旗がもっと詰まらないかと思ってました、なんて言った事に関してはしっかりと文句を言わせて貰ったが・・・。

その後、自分の部屋に戻る訳にもいかず、カラオケボックスで一夜を明かす事に（カラオケの店員には兄妹きょうだいで通した）。

因みに、途中で寝落ちして、目が覚めた時に絹旗が俺の膝を枕代わりにしていて驚いた事は蛇足だ。

ついでに言えば、カラオケに入る時に絹旗が中学生だと判明した時

が一番驚いた事も。

「ふーん。まあ、そこら辺は後で追求するとして」

すんなよ。

「オレとしては、小萌センサーの対応の方が気になるにゃー」

「あー、今回は結構怒ってたからな。」「ちゃんとやればいい結果が出るのに何でしないんですか!」「って」

「マジかよ……………」

小萌先生と言うのは俺達の担任の教師で、本名は月詠小萌^{つくよみ こもえ}。身長百三十五センチと言う小学生にしか見えない、しかし、某魔法先生とは違いしっかりと成人している幼女先生だ。

「……………よし、今日は休むか」

その先生が怒っていると聞き、俺は速やかにその現実から逃避するために回れ右をして来た道に戻ろうとする。

「おいおい、ホシちゃん。今日に限ってオレがいるのは何のためだと思っているぜよ」

しかし、元春が戻ろうとする俺の肩を掴み、それを邪魔した!

「ま、まさか、てめえ、俺の行動を先読みして……………!?」

最初から疑問には思っていたんだ。

普段なら俺が当麻を文字通り叩き起こして学校に行くのだが、今日は逆に元春と一緒に俺の部屋まで迎えに来た。それが意味する事は……、

「当麻も共犯か!？」

「小萌先生には逆らえ無いんだよ……」

すまん、と言いながら小さく頭を下げる当麻。

「まっ、諦めるにゃー」

そう言つて元春は俺を引きずつて行く。

寝不足の体には元春から逃げ出せる程の力はないし、能力を使おうとしても当麻の右手で打ち消される。

万事休す。

俺はBGMにドナドナが聞こえていた。

「おっ、ちゃんと来たんやねえ、ホシヤン」

引きずられて学校に到着。

渋々と言った感じで教室に向かい自分の席に着くと、話しかけてくる奴がいた。

彼の名前は青髪^{あおがみ}ピアス。名は体を表すとはよく言つた物で、その名の通り青い髪にピアスを付けたエセ関西人の大男だ。

さらに言えば、当麻、元春、ピアスは『^{デルタフォース}クラスの三バカ』と呼ばれている。

「うるさいだまれその口を物理的にふさぐぞこの変態」

余りの眠気に機嫌が悪くなつてしまい朝一から友人を早口で罵倒してしまっているが、決して俺が悪い訳では無いと信じている。
そう、全て眠気が悪い。

「なんやエライ機嫌悪いねえ。でも小萌ちゃんのお説教やで？興奮せえへん？」

「だからてめえみたいなドMのロリコンと一緒にすんな！！」

「何言うてるんや！ボクはロリが好きなんやない！ロリも好きなんや！後、ボクはMでもSでもいけるよ？」

「結局ただの変態じゃねえか！！」

「ボクは変態と言う名の紳士や！」

「紳士でも変態だ！」

因みにこんなやり取りは日常茶飯事である。
その所為か、最近クラスの奴らが『デルタフォースクラスの三バカ』に俺を追加しようとする動きを見せている。
それだけは阻止せねば……………！

「はい、ホームルーム始めますよー。しゃべってる人達も席に着

いてくださーい」

暫くして、我らの担任、ミニマム教師小萌先生が入ってきた。
いくら学園都市とは言え、ホームルームの内容はいたって普通。特
筆すべき事は無いまま進んでいき、

「じゃ、最後に星見ちゃん」

ついに来たか……。

俺はこの時、後で職員室に呼ばれて説教を受ける程度だろうとたかを括っていた。

しかし、小萌先生の次の発言は俺のその予想を遙かに超えていた。

「星見ちゃんは昨日の『システムスキャン能力検査』をサボったので、今日、受けて貰いますよー」

「へ？」

………。

「細かい事は後で連絡するので職員室まで来てくださいねー」

「ちょ、小萌先生！？この学校は検査器具は余所からの貸出制のハズでしょ！？何で受けられるんですか！！」

「何で星見ちゃんはそんな事知ってるですか………？」

「あつ、いや、それは、その………」

ジトーっとした目で見てくる小萌先生から視線をそらしながらどう

にか言い訳をしようと言葉を探すが、まあ、良いですけど、と追求を止めてくれた。

「先に言っちゃいますと、器具を置いてる学校に頼み込んだです。最低でもレベル3以上の能力者だからって」

「憶測でハードル上げないで!!」

「まさか、先生に恥かかせたりは、しないですよね？」

ニコツ、と極上のスマイルで俺に言う小萌先生。

これで手を抜け無くなった。

もしそんな事をすれば俺の命がクラスメイトの手によって儚く散る事に……!

「後、付き添いには黄泉川先生が……」

ジーザス。

途中で逃げる事さえ出来なくなりました。

「じゃ、頑張つて下さいね」

再びのスマイルに俺は、

「はい……」

と力無く頷く事しか出来なかった。

「で、どこまで行くんですか？　と言うか何で電車なんですか？　車出して下さいよ」

ホームルームの後、場所や時間が書かれた紙を押しつけられ、すぐさま愛穂さんに拉致され、現在ガラガラの電車の座席に座っている。

「何で昨日サボった奴のために車なんか出さなきゃいけないじゃん？　それと、もう乗ってるんだから諦める」

「ですよね……」

今更どうしようも無い事は理解しているが文句の一つも言いたくない人として当然だろう。

「ついでに、私の電車代もお前持ちじゃん」

「教師が教え子にたかるんじゃないやねえ！！」

まっ、それは冗談だ、といつも通り緑のジャージを着た愛穂さんは笑いながら、ポケットから紙を出す。

「ん、場所は……」

「どうしたんですか？」

愛穂さんはさっき俺から強奪した案内用紙を見て言葉を止める。だが、その紙を見ている愛穂さんの目は笑い、口元もニヤついている。

嫌な予感がする。

「ちょ、何処なんですか！？その表情見るとすごく不安になるんですけど！？」

紙を奪い返そうと手を伸ばすが、それよりも先に愛穂さんが俺の手の届かない位置まで避難させる。ご丁寧に俺の頭を押さえつけて。

「場所はお前の監督である私が知っていれば良いじゃん」

「・・・・・・・・本音は？」

「教えない方が面白そう」

「やっぱりか！！」

「お客様、電車内で騒ぐのはマナー違反じゃん。慎め」

「じゃあ、場所を教えるよ！」

俺の頭を押さえた手で頭を乱雑にシェイクされる所為で演算が出来ず能力が使えない。

「能力の対処ぐらい慣れてるじゃん。こっちは『アンチスキル警備員』だぞ？」

いや、それよりも……、

「……い……………」

「ん？」

「ぎ持ち悪い……………」

吐き気がする……………。

「ちょ、幾ら弱いからってあの程度で酔うか！？と言つかまだ乗り物弱いじゃん！！ああ、もう、一回次で降りるぞ！！！」

ちょうど良いタイミングで駅に止まり、ドアが開く。

それと同時に俺はトイレに走った。

少々お待ち下さい。

「……………危なかった」

「吐かなくて良かったじゃん……………」

正直かなりギリギリだった。後少しで胃の中の物をぶちまける所だった……………。

フウ、と駅のベンチに座りながら肺の中の空気を入れ換える。

「と言うか、未だに振動に弱いんだな」

「・・・・・・・・ええ、まあ」

未だにグロッキー状態で少し辛いが何とか返事を返す。

これも、実験の弊害と言う奴だ。

三半規管が何かが弱い所為でやけに酔いやすい。

これでも少しはマシになった方だ。昔は車に数分乗ると酔っていたからな・・・・・・・・。

今じゃ殆ど無いんだが、電車の僅かな振動と脳の直接的なシェイクには耐えられ無かったらしい。

恨むべきは我が貧弱な体か、実験を行ったマッドサイエンティスト狂科学者共か。

「どっちでも良いか・・・・・・・・」

今更どうしようも無いし。

強いて言うなら今後この体質が少しでも改善される事を願うだけだ。

「・・・・・・・・い・・・・・・・・おい！」

「あ、はい？どうしました？」

愛穂さんの声で思考が引き戻される。

グロッキーされていたのと考えに没頭していたので全く聞こえていなかったが、何回か声を掛けていたらしく、ようやく反応したか、と溜息を吐いている。

「で、体調はどうだ？」

「大丈夫です。だいぶマシになりました」

「そうか……いや、悪かったな。まさか今でもあそこまで弱いとは……」

「あー、別に良いですよ。次から気を付けてくれれば」

すまなそうに謝ってくる愛穂さんに手をブラブラさせながら適当に返す。

愛穂さんに悪気があった訳でも公衆の面前で恥をかいた訳でも無いし、そんなに引きずる必要は無い。

俺の考え方が分かっている愛穂さんは次は気を付けるじゃん、と言って別の話に切り替えた。

「で、どうする？ 暫く電車は無いぞ？ 待っても良いけど、かなりギリギリになるじゃん」

歩きなら予定より少し遅れる程度か、と愛穂さんは付け加える。

「あー、暫くは乗りたく無いんで歩きで行きましょう」

「オーケー。少し待つじゃんよ」

あ、でも帰日も電車か……。いや、いつその事歩くか？ でもなー、なんて考えていると、愛穂さんは地図を取り出して場所を確認していた。

その作業も数分で終わり、コッチじゃん、と言って歩き出す愛穂さんに慌ててついて行く。

ぶつちやけ、こっちには学舎の園しか無いんだけど……。

当たって欲しくないなあ、と半ば現実逃避をしながら愛穂さんの隣を歩く。

だが、人間、当たって欲しくない予感程よく当たる事は当麻の所為でよく分かっている。

せめて電撃中学生とのバトルフラグぐらいは回避出来ると良いな！。

「いやあ、俺もまさかこんな事になるとは……結構脆いんだね」(前書き)

特に言う事なし!!

「いやあ、俺もまさかこんな事になるとは……結構脆いんだね」

いきなりだが俺は今、かなりイラついている。

電車から降りた後、俺と愛穂さんは予想通り学舎の園に到着。そこで俺達の案内を承わり、待機していたのもやっぱり予想通りで御坂と白井。

来るのはかなりの高レベル能力者と聞いていたらしく、そいつの顔を見るために御坂は白井に付いて来たらしい。さらに、そこで愛穂さんが「そう言えば、『超電磁砲』と夜風ってどっちが強いんだ？」とか余計な事を言いやがった所為で御坂に火が付いてしまった。それをどうにか受け流していたが、正直言っただけだ。

そして、高レベル能力者の試験御用達だと言う常盤台のプールに案内されたのだが、居るわ居るわ生徒がうじゃうじゃと。

どうやら事前に小萌先生が珍しい風使いだと話したらしい。それも含めて貸してもらったとか……。

昨日の寝不足、さっきの電車での乗り物酔い、夏間近で上がっている気温、さらにフェンスの外から自分に集まる多くの視線。

ハッキリ言っただけ俺は能力検査を前にしてプチ切れていた。
システムスキャン

こうなりゃストレス発散もかねてかなり本気でやってやる……。

そう意気込んで、プールサイドの指定された位置に立ち、能力の演算を開始する。

やることは簡単だ。

単純に空気を圧縮していくだけ。ただし、全力で、だ！

手を前に伸ばし、掌の前に大気を野球ボールほどの球体に集めていく。

最初は見えないため多くの生徒は首を傾げていたが、愛穂さんや御坂、白井は何をしてるか気付いたらしい。もつとも、光が球体に集

められた大気によつて歪みだした時には顔を青くしていたが。

「……こんなもんか」

球体がハッキリと見える様になるまで圧縮し続けた大気の塊は今ではしっかりとした質量を持ち、中では大気が乱回転している。

それをプールの中心まで移動させ、底に沈める。

さうて、カウントダウンだ。

「3……2……」

圧縮を開放する瞬間に愛穂さんがヤバイ！と叫んで生徒を必死に非難させようとしているのが見えた。

まったく、周りを巻き込むわけ無いだろう。俺は『エアルーラー大気支配者』だぜ？

「1！」

開放！

圧縮を解くと集められていた風が台風のように暴れだす。

それはどんな物体でも立っている事を許さない、正しく暴風。

プールを形作っていた素材はそれを受け罅割れ、ひびわ捲れ、風に巻き上げられる。

だが、……それだけだ。

生徒たちが立っているフェンスの外には何の被害も無い。

当然だ。俺が暴れる大気を操っているのだから。

例え、台風だろうがそれが大気であるならばそれを掌握し、支配できる。こと風に関してじゃ、学園都市序列第一位、アクセラレータ一方通行にだって負けるつもりは無い。

俺は圧縮を解除した瞬間に暴風を支配し、その暴風でプールを境目

に立方体を形作っている。

「……これ、手を入れた瞬間に無くなるよな。よし、『暴風域』とでも名づけよう。」

取り敢えず、やり過ぎた事だけは理解した。かなり遅かったようだが……。

風を少しづつ流していき、『暴風域』を消していく。

そして残ったのは見るも無残になってしまった常盤台のプールのみに……。

結果……最大瞬間風速154.3m/s

総合評価……『レベル5』

どうも世界最大瞬間風速（アメリカの竜巻によって142m/s）を更新してしまったらしい。

「……テ、テヘ？」

「やりすぎじゃん!!」

ゴンッ!!

「イッタ!？」

『暴風域』の破壊力に俺も驚いていると後ろから接近してきた愛穂さんに思いつき後頭部を殴られた。

本気でやれって言ったのは愛穂さんなのに……理不尽だ。

「誰がプール破壊するまでやれって言ったじゃん!!」

「いやあ、俺もまさかこんな事になるとは……結構脆いんだね」

「んなわけあるか!!」

「あ、そう言えば序列って何番目だろう……?」

「話を逸らすな!!」

チツ、逸らさせてくれても良いだろうに。先生たちの面子は保てただろうに……。

そんな事を考えているとスピーカーから俺に連絡が入る。

『空崎くん、この後身体検査をしますので移動してください』

おっ、ラッキー。

どうも、俺がレベル5になるのは初なのでいくつか身体検査をして、数枚の書類に記入、その後序列が発表されるらしいが、今はそんなことより愛穂さんから逃げることの方が先決だ。

と言う事で、

「じゃ、ちょっと行ってくるから。愛穂さんは帰ってて良いですよ?」

「……いや、帰りに飯でも奢ってやるじゃん」

どうも今回は俺がワザとやった訳ではないと理解してくれたのか溜

め息を吐きながらそう言った。

いや、それよりも愛穂さんの奢りだと!?

「マジで!?!」

「ああ、お祝いじゃん」

いよっしゃー!!とガッツポーズをする俺とそれを苦笑いしながら
見ている愛穂さん。

さあて、何を食いにいこうか!? 愛穂さんが奢ってくれるなんて世
界最大瞬間風速でも更新されないと無いんじゃないか!?

あ、さっき更新されたか……俺の所為で。

「あ、そうだ。当麻たち呼んでも良い?」

「あー、まあ、あのメンバーだけなら、な」

よし! 後であいつらに電話しておこう。

奢りだと言われたら万年金欠のあいつらは絶対に食いつくはずだ。
やっぱり飯は皆で食ったほうが美味いからな。

「行つてきまーす」

奢りで飯と言われて期限を良くした俺は、そのまま鼻歌を歌いなが
ら指定された場所まで向かい、真面目に診断を受ける。
さて、その結果で出た俺の肩書きを発表しよう。

『学園都市序列第八位』

ん? 低過ぎないかって? いや、実際は分かってたんだよ。

理由は・・・いや、また今度言うことにしよう。
べ、別に早く飯食いに行きたいなんて思っ
てないんだからな！！
・・・・・・・・ごめんなさい。

この後、当麻、元春、ピアス、そして何故か付いてきた小萌先生を伴って俺の希望である鍋を食いにMへ。
そこで俺が頼んだのが、

「ホシちゃん、何だこれは・・・・・・・・？」

冷や汗を掻き、口元をひくつかせながら元春が俺に尋ねてくる。
俺と同じ席についている当麻とピアスも運ばれてきた鍋を見て同じ様な表情をしている。

因みに、小萌先生と愛穂さんは隣でまた別の鍋をつついてい
る。大
人専用だそうだ。

まあ、そんな事は置いておいて、まずは元春の疑問に答えるとし
よう。

「何って、キムチ鍋だが、それ以外の何に見える？」

「こんなキムチ鍋がある訳無いやん！！」

ビシッと俺達が囲んでいる鍋を指差してピアスが突っ込む。
そう、そこにあるのはキムチ鍋だ。だが、それが三人は気に入ら
ないらしい。

「あれ？もしかしてキムチ苦手だったのか？」

「そう言う問題でもないよ！？何この真っ赤なキムチ鍋！？常識超えてるやる！！」

「？」

「あ、ダメや、この子。僕らが何に疑問持ってるのか気付いてへん・・・」

まったく、何が不満なんだろうか。

ただ俺専用にトッピングをして、普通より多少辛くなった程度じゃないか。

「いや、これは多少じゃないと思うニャー・・・」

「うう、奢りだなんて久々についてたと思ったのに・・・不幸だ」

何だよ、折角誘ってやったのに不幸だなんて言いやがって。

鍋の中を客観的に解説しよう。

真っ赤、以上。

解説になってない？これ以上他に言い様が無いんだよ。

兎に角真っ赤。何となく立ち上る湯気まで赤く見えるぐらいに。

他三人が手を付けないので俺が最初に鍋から具をすくい、

「いただきます」

食べ始める。

俺が平然と食べ始めたのを見て、大丈夫だと思ったのか、恐る恐る三人も鍋に手を付け始める。

しかし、

「ゴハツ?!」

「イタイ!もう辛いじゃなくてイタイにやつ!!」

「クツ、学園都市のレベル5は化け物なんか!？」

一口食べただけで悶絶、そしてひたすら水をがぶ飲みしている。暫くして、ようやく喋れるまでに回復した元春が話掛けてくる。

「ホシちゃん、もしかして味覚障害？」

「あ……」

「え?マジ？」

いかん。

最近は一人で飯を食う事が多かったから忘れていた。

もう幾つ目になるか分からない実験の弊害と言う奴だ。

簡単に言って、味覚がかなり鈍く、極端な味しか感じなくなった。運命の名を冠するゲームに出てくる毒舌シスターと同じアレだ。

「すっかり忘れてた」

「普通忘れる様な事じゃないだろ……」

「うん?でもホシちゃん、普通に売店でパンとか食べてへんかったっけ？」

「最近是一般食も薄味に感じる様になりました」

髪の色とか視力は兎も角、それ以外は段々と回復してるんだよなあ。
重畳重畳。

さすがは学園都市と言うべきか、それともあのカエル顔の腕が良いのか……多分後者だな。

まっ、そんな事は置いといて、三人がこの鍋に手を付けれないと言う事はこれは俺一人で片づける必要があり、三人はまた別の鍋にしたいだろうから迅速に中身进行处理しなければならない。

「よし、五分だな」

「過ぎたら罰ゲームやでえ」

「タイマーの用意はOKにや」

「おまえ等準備良すぎだろ!?!」

おおよそ食い切れるであろう時間を言っとノリノリでタイマーを出しゲームにするピアスと元春。当麻は律儀にツツコミを入れているがこの二人がその程度で止まる訳がない。
ならば、むしろ受けて立つ!

「スタートや!」

五分後

「ごちそう様」

結果、四分三十六秒八二で完食。
大変美味しゅうございました。

「あの激辛鍋を四分半で……………」

「結構量有ったはずなんだけどにゃあ」

「早過ぎだろ……………」

「さて、次は何頼む？」

「『まだ食う気か?!』」

いや、流石に冗談だ。もう食えない。

と、言いつつも当麻達が新たに頼んだ鍋を横からつついてみると、制服のズボンのポケットに入れている携帯が鳴り出した。

「誰からやったん？」

俺が難しい表情で携帯の画面を見ていた所為かピアスが話掛けてきた。

「いや、知らないメルアド」

画面に表示されたアドレスには見覚えが全く無い。
件名も無し。文面は『登録しておいて下さい』の一言。

「間違いじゃないか？」

「だな」

文面からしてイタズラじゃないだろうし、取り敢えず、『誰?』と返しておく。

「さて、次は大根を……」

と、鍋に箸を伸ばそうとすると再びメールの着信音。
送り主はさつきと同じアドレス。

しかしさつきとは違い、件名に『すいません』と書いてある。
開けてみると『初春です。さつきは名前を入れ忘れてしまいました。
登録しておい下さいね』と言う内容と電話番号が。
そしてこれを読み、一つ疑問が湧く。

「俺、アドレス誰かに教えたっけ……?」

友人関係が狭い事もあって俺のアドレスを知っている人間はかなり限られている。

それこそ、知っている奴は今この場にいる小萌先生を除いたメンバーだけだ。

そこ、友達が少ないと言っただけだ。

単に携帯を持ち歩く習慣がないだけだ。

昨日も、絹旗達暗部の奴らは当然として、御坂達にもアドレスや電話番号を教えてないし、知っている奴らは初春と接点がない。

と言う事で誰かに聞いた、と言うのはない。
しかし、だとするとどうやって俺のアドレスを手に入れたんだろうか……?」

「まっ、いつか」

これが御坂辺りだと毎日勝負だの何だのと五月蠅そうだが初春なら問題ないだろう。

と言う事でしっかりとアドレス帳に登録しておき、再び雑談を交えながら皆で鍋をつつく。

．．．．．平和だ。

「いやあ、俺もまさかこんな事になるとは・・・結構脆いんだね」(後書き)

質問や感想がありましたらどんどん下さい！

「俺の出番、だよなあ……………」(前書き)

遅くなって申し訳ないです!!

正直、とあるは時間置きすぎて次ぎ何書くか忘れてしましまして・
・・・・。

まあ、時間掛けた割には駄文ですけどね!!

「俺の出番、だよなあ……………」

「『虚空爆破事件』？それが最近の爆発事件の名称か？」
グラビトン

「はい。アルミを基点に重力子の速度を急激に加速させて、一気に撒き散らす、『量子変速』シンクロトロンと言う能力だそうです。それが使われているらしいので……………」

「ふーん……………」

七月某日。夏休みを間近に控えたある日、俺は初春や佐天——
正確に言えば、初春の携帯を使った佐天に「『セブンスミスト』に行くんですが、一緒に来ませんか」と誘われ「まあ、特に用事も無いから良いか」と思い、待ち合わせ、さらに御坂も合流し「セブンスミスト」へ向かっている道中だ。

道すがらの会話は、冒頭でも分かる通り、最近世間を騒がせている爆弾魔について。何でもこの事件、『書庫』バンクで調べてみても犯人として該当する者が居ないらしく、捜査も難航しているんだと。

「ふむ……………」

久々に埃を被った原作知識に頼ってみるとしよう。

（えーっと、『虚空爆破事件』……………犯人は介旅初矢？かいたひ はつや苛められっ子？『幻想御手』レベルアップバーの使用者？何だよ『幻想御手』レベルアップバーって……………。使用者同士の脳を繋げて一時的に能力のレベルを上げる？使用後暫くすると意識不明に？介旅は『セブンスミスト』での事件を最後に逮捕、か……………。ん？これって今日の事か……………？）

取り敢えず、放っておいても解決するらしいが、今回は介入させてもらおう。

実際に見なければ何とも言えないが、介旅とやらが予想通りの人物なら――。

「俺の出番だよなあ……………」

「何か言った？」

「いや、何も」

いかんいかん、考え事が口に出てみたいだ。

御坂が目敏く反応するが、適当に誤魔化す。佐天、初春には聞こえてなかった様で、会話を続けている。

「でも超能力者^{レベル5}かあ。スッゴいなあ」

そんな事を考え事をしているうちに話題が変わったみたいなので、思考を打ち切る。

折角誘ってもらったんだから、楽しめる時に楽しんでおくべきだろう。これから忙しくなりそうだし……………。

「あ、そう言えば、あんた序列何位だったのよ」

佐天の超能力者^{レベル5}と言う言葉で思い出したのか、御坂が突然そんな事を言い出した。

そう言えば、まだ公式発表されてなかったな……………。

「序列って……………何のですか？」

「こいつの」

初春の疑問に俺を指差して簡潔に答える御坂。

「指差すな」

「で、何位だったの？」

無視ですかそうですか。

「八位だよ、八位」

「あのー、もしかしてそれって……………」

「……………」『システムスキャン
身体検査』で超能力者^{レベル5}に……………」

口を挟む佐天に俺が答える。

今、多分俺は苦虫を噛み潰した様な顔をしているだろう。

「能力の内容聞けばそれも納得出来ますね……………」

それを聞いて初春が苦笑いする。

こんな感じで二人にもしっかりと俺のレベルが伝わってしまった。

佐天は驚いてたけど、初春はどちらかと言えば納得していたような感じ。

そう言えば、初春は昔、一回見たんだっけ……………。

「あー、『^{レベルアップ}幻想御手』があつたらなー」

会話の最中、突然、佐天がそんな事を言い出した。

「え？何ですか、それ」

「いや、あくまで噂だし、あたしも詳しい事は知らないんだけど・・・」

そこで一度言葉を切り、こう続けた。

「あたし達の能力の強さを、簡単に引き上げる道具があるんだって。それが『^{レベルアップ}幻想御手』」

「ま、ネット上の都市伝説みたいなもんだけどさ」と付け加えて笑う。

「そりやそうですよ。そんなのがあったら苦労しません」

初春も本気にしてない様で同じ様に笑っている。だが、佐天は俯き、

「でもさ、本当にあるならあたしでも・・・」

そう呟いた。

隣にいる初春は何を言ったのか分からなかった様で疑問符を浮かべているが、無意識に周りの風を感じ取っている俺にはその呟きはしつかりと感じ取ってしまっている。

（もしかしたら、佐天の奴、結構ヤバイかも・・・）

笑って初春を誤魔化している佐天を見て、俺は一抹の不安を覚えていた。

その後、無事『セブンスミスト』に到着。

佐天もさっきの様な無理をした笑いではなく自然な笑みを浮かべている。だが、それに反して俺はひどく陰鬱な雰囲気振りまいていた。
何故かって？

『セブンスミスト』が服屋だって知らなかったんだよオ！！

聞かなかった俺が悪いのは分かっているが、もともとファッションに興味がなく、普段はもっぱらジーパンにＴシャツで過ごしている俺が、いくら大型チェーン店でも服屋を知ってる訳ないだろ、畜生！！・・・知らない方が可笑的い？分かっているよそんな事。ついでに、さっきから佐天が悪乗りして一々似合うかどうか聞いて来るんだよ。・・・主に初春の服について。普通に服ぐらいならまだ良いんだが、さすがに下着は・・・いや、何でもない。

兎に角、『セブンスミスト』に到着して僅か十数分、既に俺は精神的に疲弊していた。

「ほら、星見さんも行かないと、二人とも先に行っちゃいますよ？」
どうやら移動するらしく、グロッキー状態に陥っている俺を初春が

呼びに来てくれる。

ちょうど良い機会なのでついであの事について聞いておこう。

「なあ、初春」

「何ですか？」

「この前俺にメール送ってきてたけど、俺メルアド教えたっけ？」

「いえ、教えてもらってませんよ？」

「じゃあ、どうやって俺のアドレスを………？」

「調べました」

「ふーん、そっか、調べたのか………え」

さり気無く言われた一言に俺の動きが止まる。

初春は満面の、花の様な笑顔だ。いや、別に頭の花に掛けた訳ではなく。

い、いや、落ち着け。

調べたと言っても、愛穂さんに聞いたのも調べたに入るだろう。多少強引だがそうだと信じたい。

そんな希望を持って会話を続行。

「調べた？」

「はい」

「えっと、どうやって？」

「パソコンで携帯会社にちよつと」

……ジーザス。

何と言うか、初春の聞いてはいけない所を聞いた様な気が――

「第七学区の学生寮に住んでるんですね？学校も近い所にあるみたいですし。ああ、『アンチスキル警備員』の黄泉川先生もいるんですね？」

……個人情報保護法は何処に行った。もう（ツツコミに）
疲れたよ、パトラ。シュ。

……この事に関しての記憶は封印しよう。

「あれ？当麻じゃん。何してんの？と言うか、何でいるの？」

御坂を見かけたので合流しようとしたら、何故か当麻もいた。

初春は途中で佐天と一緒に水着売り場へ行ったのだが、さっきの様な事になったらたまったものじゃない、とこっちに避難して来たんだが、失敗だったか？

「それはこっちの台詞だってーの。俺はこの子が洋服店探してるって言うから連れて来たただけだ」

そう言つて、隣にいる女の子に一度視線をやるが、すぐに俺に戻る。

「で、夜風は？お前、ファッションとか興味無かっただろ」

「知り合いに誘われたんだよ。で、御坂も一緒だったんだよ」

な？と御坂に同意を求めている。

「そうそう……って、そんな事どうでも良いのよ！勝負しなさい！！」

だが、御坂は会話の流れをぶった切り、何故か当麻にケンカを売り始める。

いや、何故も何も、御坂が「昨日の決着を」とか言ってる所で俺が当麻に話しかけたからなんだけど。と言うか、既に髪から火花散らしてるけど、ここでやるつもりなのか？

「お前の頭ん中にはそれしかないのか？だいたい、こんな子供の前で始めるつもりかよ」

呆れた様にそう返す当麻。

確かに正論だけど、若干ずれてね？

子供の前でやるのもどうかと思うけど、それ以前に場所選べよ。その後、当麻は女の子を俺達に預け、入り口に行ってしまった。取り敢えず、戦闘が回避出来て良かったと喜ぶべきだろうか？

御坂と当麻と一悶着起こした後、御坂がトイレに行ったのだが、タイミング悪く女の子と入れ違いになって御坂が戻って来た時、ちょうど初春の携帯が鳴りだす。

「はい、もしも……『初春ッ！！！！今どこにいますのっ！

！？」

電話に出た初春の言葉を大音量の白井の声が遮る。
どうやらかなり焦っている様だ。

初春はそれに気付かずゴニョゴニョと言訳の様な物——と言っ
か、言訳その物をしているが、

『例の虚空爆破事件クラヒトンの続報ですの！』

と言っ白井の一言でそんな物をしている場合ではないと気付いたら
しい。

『衛星が重力子グラビトンの爆発的加速を観察しましてよ』

「かつ、観測地点は！？」

『今、近くの風紀委員達ジャッジメントを急行させてますの。あなたも速やかに現
場へ向かいなさい』

「ですから、観測地点つ……………」

『第七学区の洋服店『セブンスミスト』ですの！』

……………ですよねー。

まあ、俺は分かっていた事だから当然だが、慌てずに行動を始めた
初春は風紀委員ジャッジメントとしてはかなり優秀なんじゃなかるうか、と若干場
違いな事を考えながらも、初春に協力して店内の人を避難させてい
く。

「ビリビリっ、夜風っ！！」

そして、店内の全ての避難が終わった時、何故か当麻が駆け寄って来た。

「あの子は!？」

いきなりそう聞いて来る当麻。

正直、意味が分からなかったがすぐに理解し、同時に焦る。

「一緒じゃないのか!？」

「ああ。人が多くて何処行っただか分かんなくなっちまって……」

「下にはいないの?」

「多分……」

ヤバイヤバイヤバイ。

この中はいつ爆発するか分からない爆弾がセットされているのと同じだ。

大気の流れを読んで探そうにも建物の中じゃ、大気が乱れる所為で時間が掛かり過ぎる。

爆弾の方をどうにかするか? いや、そもそも爆弾がどんな形かが分からん。

俺の認識範囲なら兎も角、別の階で爆発されたら防ぎようが無い。どうする、どうする、どうする――。

「おねーちゃん」

焦った所為でパニックになりかけた俺を、あの少女の声がフラットに戻す。

携帯に耳を傾けている初春に駆け寄る少女。その手にはカエルの又イグルミが抱えられている。

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」

そう言い、初春にその又イグルミを渡そうとする少女の姿に俺と当麻はホッ、と安堵の息を漏らす。

しかし、ホッとしたのも束の間、初春はその又イグルミを投げ出し、少女を庇う様に抱きかかえる。

「逃げて下さい！！あれが爆弾ですっ！！！！」

投げ出された又イグルミはメキメキと音を立てて、中心に圧縮されていく。

そして――

――ドン――！！

『セブンスミスト』の前。

突然の爆発に多くの人がパニックに陥りかけている中、一人の少年が人混みを抜け裏路地に入っていく。

「ククク……」

耳にイヤホンを付け、メガネを掛けたその少年からは、堪え切れな
いと言う様な笑みが零れている。

「スゴイツ！スバラシイぞ僕の力！！徐々に強い力を使いこなせる
ようになってきたッ！！」

誰もいない裏路地で一人、悦に入って叫ぶ少年。

この状況を誰かに見られれば、犯人として捕まるかもしれない、な
どとは全く考えてない様だ。

「もうすぐだ！もう少し数をこなせば――」

だが、少年が言えたのはここまで。その言葉は突然後ろから襲って
きた衝撃によって遮られた。

二回、三回と空中で回転し、地面にうつ伏せに倒れ伏す少年。

背中を襲った激痛に咳き込みながらも、起き上がり後ろを――
裏路地の入り口へと顔を向ける。

そこに、何処にでもある様な一般的な高校の夏服を着ている、灰色
の髪と瞳の少年――夜風が立っていた。

「もう少し数をこなせば……何だつて？」

低い声でそう尋ねる夜風の、爆発事件の犯人である少年――介
旅初矢を見る目は何処までも冷たい。

「よう、弱者^{じゆうじやく}。用件は、分かつてるだろ？」

「な、何の事だか、僕にはさっぱり……」

介旅はそう言いながらも、持っていたバッグの中から一本のスプーンを取り出し、夜風に投げつける。

そのスプーンは、放物線を描きながらヌイグルミと同じ様にメキメキと圧縮され、夜風のすぐ側で爆発する――はずだった。

「え……」

スプーンはその形を歪め、原形を留めていないにも拘らず、爆発を起こさずに地面に落ちた。

介旅はその光景が信じられず、呆けた様な声を出す。

「なっ、どうして……」

「シンクロトロン量子変速だろうと、結果的に起こるのは爆発だ。燃える物も無い、衝撃を伝える空気も無い様な空間で、爆発が起きる訳が無いだろ」

夜風はつまらなそうに、誇る必要も無いかの様に吐き捨てる。

『セブンスミスト』での爆発で、怪我人はいない。スプーンの周に作り出している空間、これと同じ物を壁の様に作り防壁とした事で、あそこにいたメンバーは爆発の熱さえ浴びていない。尤も、夜風自身は、俺が何かしなくても、当麻がどうにかしただろうな、なんて事を考えているが。

あそこで爆発その物を防がなかったのは、犯人を判別するため。爆発後、人混みを抜けてどこかに行こうとしている人物なんかがいれば、参考程度になるだろうと思っていたが、大した期待もしていなかったのだが……。結果、見事に大当たり。夜風はバカじゃないのか、と呆れてしまう。

未だに地べたに座ったままの介旅に近づき、こちらを見え上げているその顔を、いや、その顎を思いつき蹴り上げた。

「で、どうよ弱者^{じゆうじやく}。満足したか？好きな様に能力^{ちから}を使って、スッキリしたか？」

夜風は顎を押さえて自分の足元に蹲^{うすくま}る介旅を見下ろしたまま、そう言う。

「……いつもこうだ。何をやっても僕は地面に……。ねじ伏せられる」

介旅は蹲ったまま呟く様に言葉を漏らす。だが、次に夜風に目を向けた時、そこに浮かんでいたのは怨嗟の念。

「殺してやるッ！お前みたいなのが悪いんだよ！！風紀委員^{ジャッジメント}だつてガッ！？」

夜風は介旅の言葉を腹部に蹴りを入れる事で強引に遮り、介旅の胸倉を掴みあげる。無表情だった夜風の顔は、今はハッキリと怒りの色に染められている。

「黙れよ。地面にねじ伏せられる？テメエの事情なんて知った事か。責任を他所に押し付けてんじゃねえ。そう言うのは全部テメエが弱かったからだろうが。周りがどうにかしてくれるなんて甘ったれた考え持つてんじゃねーよ」

そこまで言つて、夜風は介旅を突き飛ばす様に手を離した。開放された介旅はヨロヨロと数歩、後ろに下がり地べたに尻餅をつく。

「能力ちからを求めるのは悪い事じゃねえ。だが、覚えとけ。その使い方は、間違えちゃいけないんだよ!!」

夜風はそう言い切ると同時に、空気を圧縮した塊で介旅をぶん殴り、気絶させた。

「あー、ダメだ。今日のは黒歴史だ……」

白井に連絡をした後、裏路地から出たの俺の第一声がそれだった。いや、だって、ねえ？

実際、あんな事言っではみたものの、俺自身が正しい使い方が出来るのか、なんて問われれば、ハッキリと答える事は出来ない訳で……、そんな俺が、偉そうな事を、しかもメチャクチャ恥ずかしい事を言っちゃったのはどうしようもなく、黒歴史だ。

まあ、最後の最後に恥ずかしさに耐えきれず気絶させてしまったが、それは別に良いだろ。

取り敢えず、この後は警備員アンチスキル（十中八九、愛穂さん）との楽しい話とりし合いがあるらしい。

「……鬱だ」

そう呟いて、俺はしぶしぶ重い足を警備員アンチスキルの方へ向けた。

「貸し一な、当麻」(前書き)

ごめんなさい。それしか言う事ないです。本当にごめんなさい。

「貸し一な、当麻」

「・・・・・・・・・・抜いという正解だったな、コンセント」

夏休み初日、俺は隣から聞こえる不幸な隣人の叫び声を聞いて目を覚ました。

昨日の夜、雷雲が急速に発達するのを感じて予め対策を打っておいたのだが、どうやらその原因と思わしき我が友人は見事に被害にあつたらしい。まあ、どうせまた御坂にでも喧嘩売られたんだろう。ご愁傷様。

「・・・・・・・・・・飯」

寝起きで余り働いていない頭をガリガリと掻きながら、食い物を求めて冷蔵庫を物色。

冷蔵庫・・・・・・・・空っぽ。

冷凍庫・・・・・・・・冷凍食品のオンパレード。

「・・・・・・・・・・まじかよ」

故障云々の前にまともな食い物が入ってない我が家の冷蔵庫に絶望した。今日辺り、買い物に行っておかなきゃな・・・・・・・・・・。

取り敢えず、「おいしい炒飯」とか言う皿に入れてラップを掛けずに七分程電子レンジでチンするだけの物を用意しつつ、その間に洗面台へ移動して顔を洗う。冷たい水のお蔭で漸く頭が活動し始めた。

「我ながら、朝に弱いなあ・・・・・・・・・・」

実験の副作用とは全く関係ない俺にとっては珍しく健全な弱点を嘆きながら、出来上がった炒飯をテーブルに腰掛けてモグモグと食す。行儀悪い？そんなもん知った事か。と言うか、こんな食生活を続けていると本当に体を壊しかねないな……。

さて、『虚空^{グフビトン}爆破事件』から数日、特に何事もない平和な日々を送っていた。まあ、この間の暗部が、未だに俺の周りをウロチョロしている、と言う危ない部分もあるけど……。俺を尾行しないならせめて能力は解除して来い。室素纏ったままとか、俺に見付けて下さいって言ってるようなもんじゃねーか。

「取り敢えず、当麻んとこ行くか……………」

恐らく、いや絶対に補習で担任^{こもえんせい}から呼び出しを受けているだろうし、あまつさえ冷蔵庫の中身全滅した上に、カップやきそばを台所にぶちまけている可能性がある友人に食材のお裾分け^{れいとうしよくひん}でもしよう。ついでに、冷凍庫の中身をなくしてくれるとありがたい。ぶっちゃけ後^そ者がメイン^{つち}なんだけど……………。

「で？」

「いや、えっと、コレは、ですね……………」

数分後、当麻の悲鳴が聞こえたから少しだけ急いで能力で扉の鍵を開けて不法侵入した所、当麻の部屋には見た事もない少女の姿がありました、と。追記するなら全裸の、それも銀髪に碧眼のえらく可愛い少女が。

俺が見たのは全裸で胸を張っている少女の肩に手を掛けている当麻。当然、俺は速やかに計帯電話を取り出し愛穂さんに連絡を取ろうとした所で当麻に慌てて止められてしまった。

そして現在、腕を組み仁王立ちする俺の前には、正座でクソ暑い蒸し風呂の様な部屋の中、冷や汗を混ぜながらダラダラと汗を流している当麻の姿があった。因みに、件の少女は当麻のベッドのシーツに包まって服の修理中である。

当麻の奴、一体何をしたんだか。……………ナニではない事を祈るばかりだ。

しどろもどろに語る当麻曰く、「彼女は朝ベランダに干してあった」。曰く、「名前はインデックスと言うらしい」。曰く、「彼女は魔術師であり、魔術結社に追われていたらしい」。曰く、「彼女の修道服は結界だったらしく、魔術の証拠を求める当麻が右手で触れたらバラバラになった」。

「……………」

あ、頭が痛い……………。

この十数年間で学園都市の生活が染み付いた俺には余りにも頭が痛い話だ。勿論、イタイ、と言い換えても可だ。

だが、残念な事にそれが事実であると信じなければならぬ証拠が揃ってしまっている。

例えば、当麻の『イマジンブレイカー幻想殺し』。あらゆる異能を打ち消すその右手に触れ、壊れたと言うのなら、少なくとも何らかの力が働いていたと言う事になる。

そして、コレが一番の証拠なのだが、もういい加減邪魔臭くなって

きた俺の原作知識とやらがこの少女が本物であると訴えている。ついでに、物語が始まった事も。

うわぁ、もう厄介事のおいしかしねえ……………。

まぁ、別に放っておいても当麻がどうにかするんだろぅが、知っていて放置する訳にはいかないし……………。詰まる所、精々出来る事をやるしかない訳だ。

「はぁ……………」

ホント、溜め息が出る。

何でもこうも俺の周りには、当麻と言い御坂と言い、ついでにこの間の暗部の奴らと言い、厄介事トラブルメイカーの種ばかりが集うのか……………。まぁ、そんな奴らと関わりを持ったのが運の尽きか……………。出来る限り人死にが出ない様にするでしょう。親しい奴らに死なれたら、気分が悪いしな。

取り敢えずは……………。

「飯にするか」

俺がそう言った瞬間、修道服改め針の莖へと着替えた少女が眼を輝かせながら、シートから飛び出してきた。

「さて、確りと飯を食い終えた所で言うのもアレなんだが……………」

・当麻、補習は？」

「へ？」

と、俺の問い掛けに間拔けな声を出す当麻だが、時計を確認した瞬間に顔が真っ青になっていく。まあ、今の時間ならまだ全力で走れば間に合うだろう。……超ギリギリでな。

「うおおおおっ！？ やつべええええ！！」

「ちなみに、さっき元春の奴も出て行ったから、急げば会えるんじゃないか？」

バタバタと慌しく用意を始める当麻に、そんな事を言いながら今日の予定を立てていく。まあ、殆どだめになるだろうけど……。

「と、俺今から学校だけど、お前どーすんの？ここに残るんなら鍵渡すけど。夜風は？」

「俺は部屋に戻る。今日は病院行かなきゃなんないし」

「……私も出てく」

ご飯、ごちそうさま。おいしかったよ、なんて事を笑顔で俺に言つて、スタスタと玄関に向う禁書目録さんシスター。当麻は彼女のフードが落ちているのに気付いたらしく、何故か拾おうかどうしようかで右往左往している。

何して——ああ、右手じゃ壊れるからか……。いや、左手で拾えよ。

「あつ、あー・・・・・・・・」

そんな当麻に気付いたのか、インデックスは振り返って、

「うん？違っただよ。いつまでもここにいと、連中もここまで来そうだし。君だって、部屋ごと爆破されたくないよね？」

サラリと、そう言つてのける。特に気負いも何もない事が、逆にそれがありえる可能性である事を際立たせていた。

尤も、当麻やインデックスは知らないだろうが、ある意味、その程度の事は学園都市の暗部では日常茶飯事だったりするんだけど、まあ、今はどうでもいいだろ。

「ばつ、みゃ！みゃああー！」

と、ちょっと昔の事を考えていたらいつの間にか当麻が玄関の周りでのた打ち回っていた。

「・・・・・・・・何があつただよ。いや、どうせお得意の不幸スキルが炸裂したただけだろうけども。って、携帯が・・・・・・・・」

——ビキリ。

「う、うつつうつ！ふ、不幸だ・・・・・・・・！」

うわぁ・・・・・・・・。玄関のドアで足の小指打った拳句、のた打ち回って携帯を床に落としたら画面に罅が入りました、って・・・・・・・・。何と言つか、もはや不幸じゃ片付けられない位置まで来ている気がしてならないぞ、おい。

「不幸って言うより、ドジなだけかも」

そう言っただけ笑みを見せるインデックス。

「けど、『イマジネーション幻想殺し』って言うのがホントにあるなら、仕方がないのかもしれないね」

「………どういうことでせう？」

「うん、こう言う魔術マジックの世界のお話なんて君は信じないと思うけど、神様の加護とか、運命の赤い糸とか。そう言うものがあつたとしたら、君の右手はそう言うものもまとめて消していつてるんだと思うよ？」

安全ピンだらけの服を着ているインデックスは、『歩く教会』にあつた力も神ラッキーの恵みだからね、と言ってクスクスと笑った。

ふーん、科学か魔術かでも解釈が違うのか……。あ、運命の赤い糸がないからフラグを立てては壊しを繰り返しているのか。納得。

「待てよ、幸運だの不幸だのって言葉は、確立と統計のお話だぜ？んなのある訳……。」「

——バチリッ、ズキンッ！！

「ッ！！~~~~~ッ！！」

……。いや、コレは……。なあ？

何が起こったかと言えば、ドアノブに触ったいた当麻の手に普通じやありえない様な静電気が流れたかと思えば（能力で観測できた）、

どうやら右足のふくらはぎを攣ったらしく、そのまま悶える事約十分間。

「・・・・・・・・あの、しすたーさん？」

「なに？」

「・・・・・・・・ごせつめいを」

「ご説明って言うか、君の右手の話が本当ならね、その右手があるだけで『幸運』ってチカラもどんどん消していつてるんだと思うよ？」

「・・・・・・・・つまり、あれですか」

「君の『右手』が空気に触れているだけで、バンバン不幸になっていくって訳だね」

「ぎゃあああああああ！！ふ、不幸だあああああああ！！」

「アッハッハッハッハッハッハッハ！！」

叫ぶ当麻、爆笑する俺。

科学では匙投げられて、眉唾物であるオカルトにまで不幸扱いされるって！どんだけだよ！！確かに、当麻曰く、「大宇宙の悪意の様な物を感じる」程、当麻は幸運と言う物から見放されている。だけど、それが右手の所為って、もうどうしようもねーじゃん！！そしてそんな当麻をニコニコと擬音が聞こえそうな程の笑顔で眺めている真っ白なシスター。

「何が不幸って、君。そんな力を持って生まれてきちゃった事がある不幸だよな」

ぶっちゃけ、どう考えてもトドメだ。アレか、人の不幸は蜜の味ってか？・・・当麻の側にいれば確実に胸焼けだな。

と、ここまで来て漸く話がズレている事に気付いたらしい当麻は、その目に涙を流しながらインデックスに声を掛ける。

「ち、違くて！お前、ここを出てどっか行くアテでもあんのかよ？事情は分かんねーけど、魔術師つてのがまだ近くをうろついてんならウチか夜風の所に隠れてりゃいいじゃねーか」

しれっと避難場所に俺の部屋を加えるな。いや、別にいいんだけど、隣じゃ意味無いだろうに。

「ここにいと『敵』が来るからね」

「何で断言できんだよ？目立った行動しないで大人しく部屋ん中にいりゃ問題ねーだろ」

「そうでもないんだよ？この服、『歩く教会』は魔力で動いてるからね。教会は神力しんりょくって呼ばせたいみただけど、同じ力マナだし。つまり、簡単に言っちゃえば、敵は『歩く教会』の魔力を元に探知サーチかけてるみたいなんだよね」

「だったら、何だってそんな発信機みてーな服着てんだよ！」

「それでもこれの防御力は法王級ぜうたいだったからだよ？もっとも君の右手に粉碎されちゃったけど。・・・粉碎されちゃったけど？」

痛い所を突かれた所為か、うつとたじろぐ当麻に、インデックスが涙目で追い討ちを掛けている。正直、もう俺いらんないんじゃないかと思ってるのだが、今一抜け出す機会がないので取り敢えず大人しくしていよう。

「けどよ、俺の右手で『歩く教会』ってのはぶっ壊れちまったんだろ？ だったら発信機みてーな機能もなくなっちまってんじゃねーか？」

あー、そりや当麻の言う通りだけど、相手が本気でインデックスって子を狙ってるなら――。

「だとしても、『歩く教会が壊された』って情報は伝わっちゃうよ。さっきも言ったけど、『歩く教会』の防御力は法王級なの、簡単に言っちゃえば『要塞』みたいにね。……私が『敵』なら、理由はどうあれ『要塞』が壊れたと分かれば迷わず打って出ると思う」

そうだよなあ。当麻の話じゃ、インデックス本人に魔術は使えないそうだし、そんな中で絶対の盾が無くなったって伝われば、攻め込むよなあ。あくまで、相手が本当に敵なら、だけど。

「ちょっと待てよ、だったらなおさら放つとけねーだろ。魔術なんざ今でも信じらんねーけど、とにかく『誰か』が追ってきてるって分かってんのにお前を外に放り出せるかよ」

当麻にそう言われて彼女は、そんな事を言われるとは思ひもしなかったと言う様に――そんな言葉を言ってくれる人がいるとは思ひもしなかったと言う様に、きょとした、年相応の少女の表情を浮かべ、

「……、じゃあ。私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる？」

はつきりと、拒絶した。笑顔で。そう、あまりにも辛そうな笑顔で。その差し伸べられた救いになるかも知れないその手を振り払うのに、どれだけの葛藤があつたのかは知らないし、もしかしたら無かったのかも知れない。

だが、たった一つ。たった一つだけ思ったのは、その笑顔は嫌いだと言う事。その笑顔は俺に、少しだけ、昔の事を思い出させるから。そこから先の会話は、殆ど聞き流していた。

金属の安っぽいスプーンを弄びながら聞いた話では、どうやらインデックスは英国式の教会を目指すらしく、もう既にこの学生寮から出て行ってしまうているだろう。

俺もそろそろ病院に行こうと玄関で靴を履き掛けた時に、ふと、慌てて補修の準備をしている当麻に声を掛けてみた。

「なー、当麻」

「何だよ、今見ての通り上条さんは忙しいんですけど？」

「さっきのシスター、当麻がどうにか出来るなら、どうにかしたい？」

その問い掛けに返って来たのは沈黙。と言うよりも、この答えは聞く必要もない明らかな愚問だったのだ、この自らを偽善者^{フォックスワード}なんて称する真正のお人好しには。

トントンと靴を履き揃えて、扉を開いて外へ出る。そして、

「貸しーな、当麻」

俺がそう言つのと扉が閉まるのは、同時だった。取り敢えず、今度飯でも奢ってもらふ事にしよう。

本当なら、俺の存在は全く必要ない。

これは元から完成して出来上がっている話だ。そこに俺の様な不純物が介入する余地は一分たりとも存在しないだろう。それでも、それでもだ。

俺がいれば防げるかも知れない事があるなら、それが不純物でも何だっていい。俺は俺の動きたい様に動く。物語の流れなんぞ知った事か。

「じゃ、取り敢えず――」

・・・・・・後から付いて来てる絹旗をどうやって撒くか考えよう。話はそれからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3519o/>

とある未完の大気支配(エアルール)

2011年10月10日13時03分発行